

平成 29 年度

大阪大学

文学研究科・文学部 インターンシップ報告書

編集・発行

大阪大学 文学研究科・文学部
教育支援室

560-8532 大阪府豊中市待兼山町 1-5
平成 30 年 7 月

目次

はじめに	教育支援室インターンシップ専門委員（文学研究科教授）	堀江剛	1
1	音楽関係		
1.0	音楽関係インターンシップ概要	文学研究科教授	伊東信宏 2
1.1	音楽ホールインターンシップ報告	文学部音楽学専修	小松啓子・平良理子 3
1.2	京都コンサートホールインターンシップ報告	文学研究科博士前期課程	近藤美奈子・八谷誠人 8
2	演劇関係		
2.0	兵庫県立尼崎青少年創造劇場（ピッコロ劇場）劇場制作研修	文学研究科教授	永田靖 17
2.1	劇場制作研修 受講生のレポート1	文学部演劇学専修	佐藤勇輝 19
2.2	劇場制作研修 受講生のレポート2	文学部演劇学専修	山内日菜子 23
2.3	劇場制作研修 受講生のレポート3	文学部演劇学専修	横井温子 27
2.4	劇場制作研修 受講生のレポート4	文学部演劇学専修	工藤舞弥 29
2.5	劇場制作研修 受講生のレポート5	文学部演劇学専修	清田采花 31
2.6	劇場制作研修 受講生のレポート6	文学部演劇学専修	小國真奈 33
3	美術関係		
3.0	大阪市立美術館でのインターンシップ	文学研究科教授	藤岡穰 37
3.1	大阪市立美術館インターンシップ報告	文学研究科	波瀬山祥子（博士後期課程）・永谷かのこ（博士前期課程） 39

はじめに

本報告書は、平成 29（2017）年度に大阪大学文学部および大学院文学研究科で行われたインターンシップ、ならびにその準備や事後指導を行っている授業について報告したものである。実習先・人数・期間は以下のとおりである。

音楽関係

- | | | |
|----------------------------|----------|------|
| ○ いずみホール | 学部生 2 名 | 5 日間 |
| ○ あいおいニッセイ同和損保 ザ・フェニックスホール | 学部生 2 名 | 5 日間 |
| ○ 京都コンサートホール | 大学院生 2 名 | 3 日間 |

演劇関係

- | | | |
|---------------------------|---------|------|
| ○ 兵庫県立尼崎青少年創造劇場（ピッコロシアター） | 学部生 6 名 | 4 日間 |
|---------------------------|---------|------|

美術関係

- | | | |
|-------------|----------|--------------|
| ○ 大阪市立美術館ほか | 大学院生 2 名 | 10 ヶ月（週 1 日） |
|-------------|----------|--------------|

報告書を読むと、インターンシップに参加した学生にとって、実習先での体験がかけがえのないものであったことが読み取れる。学生たちを迎えて指導してくださっている受け入れ諸機関の方々に、この場を借りて、心よりお礼を申し上げる。

文学部・文学研究科としての報告書のとりまとめは平成 16 年度から始まるが、関連授業が毎年開講され、現在のような体制となったのは 18 年度である。18～29 年度の 12 年間に、音楽・演劇・美術・映画の各方面のインターンシップが行われてきた。ただし映画関係は、26 年度末に担当教員が定年退職したため、現在は開講されていない。参考のために、18～29 年度にインターンシップに参加した学生数を掲げておく。

	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	計
音楽	5	3	4	2	4	6	6	3	3	3	3	6	48
演劇	4	4	4	3	2	6	2	4	3	0	3	6	41
美術	0	0	0	2	2	1	1	1	0	0	0	2	9
映画	1	0	1	0	0	0	1	4	0	-	-	-	7
小計	10	7	9	7	8	13	10	12	6	3	6	14	105

（単位修得を目的とせずに、インターンシップに参加した学生の数を含む）

教育支援室インターンシップ専門委員（文学研究科教授） 堀江 剛

1 音楽関係

1.0 音楽関係インターンシップ概要

文学研究科（音楽学研究室）教授 伊東信宏

音楽に関係するインターンシップは、今回も例年どおり、いずみホール、ザ・フェニックスホール、京都コンサートホールの3館に受け入れを承諾していただき、6名の学生・院生について実施した。授業科目としては、後期月曜3限に開講している「音楽学演習」受講生を母体としている。以下にはザ・フェニックスホール、および京都コンサートホールでのインターンシップについてのみ、受講生からの報告を掲載する。

インターンシップ全体の経緯をここにまとめておく。今回も、報告会が平成29年度にずれ込んだが、これは昨年度末、国際会議開催などで筆者の時間がなかったからである。

- ◆ 4月「音楽学演習」（前期）の開講に伴い、インターンシップの受講者を募集した（なお、京都コンサートホールについては、ホール側の希望により院生を派遣することとなった）。今回は6名の希望者があり、それぞれの研修先を決定した。
- ◆ 2017年11月15日(水)～11月20日(月)(11月19日を除く5日間)、いずみホールでのインターンシップ実施。
- ◆ 2017年11月15日(水)～11月19日(日)の5日間、ザ・フェニックスホールでのインターンシップ実施。
- ◆ 2017年10月11日(水)～13日(金)の3日間、京都コンサートホールでのインターンシップ実施。
- ◆ 2018年1月16日(火)、上記3つのインターンシップについて、音楽学研究室の総合演習において、受講者6名が報告。

今回も、充実したプログラムを用意して受け入れていただいていたホールのスタッフの方々に深くお礼を申し上げます。

1.1 音楽ホールインターンシップ報告書

〔学生からの報告〕

文学部 3 回生 音楽学専修 小松啓子
文学部 3 回生 音楽学専修 平良理子

【研修先】

あいおいニッセイ同和損保 ザ・フェニックスホール
(以下、適宜「フェニックスホール」と略称する)

【研修期間】

2017 年 11 月 15 日 (水) ～11 月 19 日 (日)

【ホール概要】

所在地：大阪市北区西天満 4-15-10
開館：1995 年 5 月 13 日
席数：1 階 168 席、2 階 133 席 合計 301 席 (最大 335 席)
構造：乾式浮き構造

【研修最終日の公演】

公演名：レクチャーコンサートシリーズ 29
今井信子 presents J.S.バッハ レクチャーコンサート
～バッハの時代と教会音楽～
公演日時：2017 年 11 月 19 日 (日) 14:00 開演／13:30 開場
会場：あいおいニッセイ同和損保 ザ・フェニックスホール
入場料：一般 3,500 円、学生 1,000 円
出演者：大槻晃士 (講師／ヴィオラ・ダ・スパッラ)
井上静香 (ヴァイオリン)
田中祐子 (ヴァイオリン)
中田美穂 (ヴィオラ)
三宮正満 (バロック・オーボエ)
重岡麻衣 (鍵盤通奏低音)
緋田芳江 (ソプラノ)
中嶋俊晴 (カウンターテナー)
眞木喜規 (テノール)

【研修内容】

- 第一日 11 月 15 日 (水) 午前 9 時～午後 5 時
- ① ホール職員紹介 (全体朝礼)
 - ② フェニックスホールの概要
 - ③ ホール内案内・機械室など
 - ④ Salon 発送作業

第二日 11月16日(木) 午前9時～午後5時

- ① 自主企画事業、公演広報①
- ② 消防訓練
- ③ 自主企画事業、公演広報②

第三日 11月17日(金) 午前9時～午後5時

- ① チケット業務
- ② 貸館事業、貸館受付、インフォメーション制作、HP
- ③ 著作権・友の会組織・運営
- ④ 機関誌「サロン」について
- ⑤ 全体会議

第四日 11月18日(土) 午前9時～午後5時

- ① 公演リハーサル

第五日 11月19日(日) 午前9時～午後6時

- ① 自主企画公演 準備 公演
「公演当日の対応について」を研修テーマとして
ホール内準備、公演本番・終演後対応の実務実習

【研修内容詳細】

〈第一日〉

まず全体朝礼に出席し、職員の方とインターン生それぞれの挨拶と自己紹介がおこなわれた。インターン生は、所属や氏名などの基本的な自己紹介に加えて、本インターンシップに参加を希望した動機を話すよう求められた。

その後、フェニックスホールの概要について支配人から説明を受けた。ここでは、貸し館公演のみならず自主企画公演をおこなっている。その理由は、同ホールが、利益追求のみに価値を置くのではなく、「ハイグレードな室内楽ホール」を標榜し地域の芸術・文化の発展に貢献すべくメセナ活動に力を入れているためである、との説明があった。職員は自主企画グループとホール管理グループにわかれて業務をおこなっているとのことだ。

説明の後、実際にホール内を案内していただいた。その際、支配人からも説明のあった、ホール内に飾られた様々な絵画や彫刻に注目した。ホール開設時に旧同和火災取締役社長として指揮をとられた現館長の岡崎真雄氏は芸術に造詣が深く、これらの絵画や彫刻も館長によって精選されたものだという。支配人も、館内を案内してくださった方も、その点を強調されていたことから、ホールにとって館長の存在の大きさを感じた。

午後からは自主企画グループの職員の方々と機関紙「Salon」の発送準備をしながらお話をする機会があった。話題はホールのことから個人的なものまで多岐に渡った。

〈第二日〉

まず、現在の一般的な公共ホールと民間ホールの状況について、詳しくお話をうかがった。指定管理者制度や文化庁からの補助金について知ったと同時に、首都圏以外のホールの厳しい状

況を理解した。また、フェニックスホールがあいおいニッセイ同和損保に所属しているために、補助金の申請ができないこと、若い人に足を運んでもらうために SNS を活用したいができないことも知った。

午後にはあいおいニッセイ同和損保フェニックスタワー全体の避難訓練があり、ホールでコンサートが開催されているときに地震がおこった場合のための訓練もあわせて行われた。レセプションの方々も参加しての本格的な訓練だった。はじめはなかなか統制がとれておらず、地震発生を知らせ、避難を促す放送のタイミングもうまくあわなかったが、互いが率直に意見を言い合い、何度もやり直して丁寧に確認がなされた。

避難訓練終了後、年に 15 回程度おこなわれる自主企画公演や、企画を募集してホールを無料で貸し出すエヴォリューションシリーズの詳細についてうかがった。毎年人気を博している自主企画として、ティータイムコンサートシリーズがある。これは金曜日の午後に茶と茶菓子を振る舞い、女性をターゲットに上質な室内楽を肩肘の張らないかたちで楽しんでもらう企画だ。半分の席は年間通し券で売れる人気ぶりであるが、客層はリタイア後の年配の方が殆どである。またエヴォリューションシリーズは、審査の上毎年四つのコンサート企画を選出し、ホールと付帯設備を無料貸与するもので、第一日目に支配人からもメセナ活動の中でも特に社会貢献度の高い企画として紹介があった。

〈第三日〉

まず、チケット業務に関して説明を受けた。フェニックスホールのチケットセンターのモットーは「誠実・尊敬・丁寧」であるとのことだった。その理由として、客の中には「フェニックスは奥座敷」との意識で「ハイ・ソサイエティー」を志向する方やホールに対して「本質」を求める方も多く、そうした方々に失望感を与えないことが何よりも重要であるという説明があった。チケットセンター担当はひとりだが、電話オペレーターは全女性社員が担当している。メールやプレイガイドでのチケット予約は比較的若年の方からのものが多い一方、電話予約は年配の方が主であるとのことだった。電話対応は客と直に接する部分であるため、コンピュータで厳重に管理された顧客情報をもとに親しみやすい会話でのやり取りがなされる。親会社が金融庁の管轄であるために内部統制が非常に厳しく、ホールの使用するコンピュータなどの管理も厳重であるとのことがあった。

次に、貸し館事業についての説明をうかがった。基本的にプロに限って貸していること、まれに楽器店のコンサートに貸して小さい子どもが出演するような場合でも、発表会ではなくコンクール形式にしてもらっていることなどを知った。さらに、実際に貸し館に申し込む際の手続きを書いてみて、申請者がどのようなことを判断してホールに頼むのか、どのくらいの金額が必要になるのかを調べた。

午後はまず友の会の運営について、さらに著作権についてお話をお聞きした。曲の著作権について、演奏された全ての曲目と演奏時間を 5 営業日以内に申請しなければならないことや、チラシ自体にも著作権が発生することなどについて詳しくうかがった。その後機関誌 Salon の発行までの流れを詳しくうかがった。

最後に全体会議があり、二日後に行われるレクチャーコンサートと、翌週に行われるティータイムコンサートの打ち合わせに同席した。コンサートの細かい流れをおいながら注意点を確認した。

会議後、二日後のコンサートで挟み込みチラシとして使用する予定の、翌年のティータイムコンサートのチラシに間違いがあったため、訂正シールを 700 部ぶん貼る作業を行った。

〈第四日〉

前日に貼り終わらなかった訂正シールを貼る作業から始め、その後翌日のコンサートに向けて挟み込みチラシを重ねていく作業を行った。

午後は翌日のコンサートのリハーサルを見学した。レクチャーされる講師の方がアメリカから直前に来日されたこともあり、打ち合わせが満足に行えていないことなどに関して、インターシップの初日から、自主企画グループの方々がこのリハーサルに対する不安をもらしておられたが、実際にリハーサルを見学しているときも、普段のリハーサルとは様子が違う、という話をうかがった。リハーサルにはおもに吉本さんと宮地さんが立ち会っていらっしゃったが、殆ど口を挟むことはなく、リハーサルが進むのを見守っている様子だった。後からきくと、今回の公演のような古楽器系の演奏会では、ホールの関係者と一緒というよりも、演奏者どうしでリハーサルが進むことが多い印象があるとのことだった。

〈第五日〉

まず挟み込みチラシに追加されたチラシを重ねて、200 部分ホッチキス止めする作業を行った。その後は通しのリハーサルを見学し、12 時半ごろからは担当の方がつくってくださったスケジュールに従って、「公演当日の対応について」をテーマとして行動した。

コンサートの前半はホールの中に入って見学し、後半は舞台袖でステージマネージャーがストップウォッチで演奏時間を細かく記録するのを見学した。また、空いた時間で公演に至るまでの半年余りの流れを説明していただいた。終演後は、お客様と出演された方の交流の様子を見学しつつ、片付けのお手伝いをし、研修を終えた。

【全体の感想】

研修中、「とにかく若い人が来ない」というお話を何度もうかがったが、日曜日のコンサートで来場者の様子を見ていて、本当に年配の方ばかりなことにあらためておどろいた。何人かいた若い人も、ほとんどが出演者の知り合いだったらしく、終演後出演者と話し込む姿がめだった。ホールの方がアピールの対象にしたい「若い」人は何歳ごろまでかたずねたところ、「40代まで」とのことだったが、その世代にもっとも有効な手段のひとつとして、やはり SNS を活用する必要があるのでは、とうかがったところ、「炎上が怖いので SNS はまったくできない」というお返事をいただき、大企業に所属するホールが新しいことをする、ということの難しさを感じた。

もうひとつ、インターシップ中に何度もうかがったお話が、「少しでも実験的な公演のチケットは売れない」という話である。友の会に加入しているような、フェニックスホールの常連のお客さんは年齢層が高く、「王道」のプログラムを好む。そのため、現代音楽や、あまり知られていない作品などを演奏するコンサートのチケットは売れにくい、とのことだった。研修に行くまで、「フェニックスホールはあいおいニッセイ同和損保がメセナ (CSR) として運営している」というイメージが強かったため、そこまでチケットが売れるかどうかについての悩みがあるのは意外だった。しかし同時に、「このホールが黒字を出そうが赤字を出そうが本社にとっては誤差の範囲内」というお話もうかがい、社会貢献活動の一環としてホールを運営することの意味をあらためて考えさせられた。

最後に、自分が普段所属する大学や身近に接する機会の多い研究者の、社会における役割を考えた 5 日間だった。本学教授の伊東信宏先生が音楽アドバイザーを務めるフェニックスホールで、研究者（この場合は特に音楽学研究者であろう）に対する、「現場」であるコンサートホ

ール職員からの率直な見方を知ることができたのは、大学や研究者、ひいては自分の立ち位置を相対化するという意味でも非常に意義深い。フェニックスホールの職員の方々の中にも、様々な出自・立場の方がいらっしゃったが、様々な現実的制約の中でいかに「良い音楽」を提供できるかという課題に取り組んでいらっしゃるという点においては一致している気がした。そしてその点は、ともすると「単なる気晴らし」として見られがちな音楽というものを捨て置かない研究者の姿勢と必ずしも相容れないものではないはずだ。しかし、何が「良い音楽」なのか、音楽ホールの社会における役割とは何かという点で、この二者には不一致があるのではないかと感じる点もあった。もちろん、そうすんなりと意見のまとまる話でもないことは承知の上で、研究者と音楽ホール関係者との連携はどの程度進んでいるのだろうかとふと疑問に思った。こと音楽学という分野においては、研究をしながら楽器を演奏している方や、逆に演奏者として身を立てながらも大学に所属している方が多い印象があり、そうした方々から実演と研究の関係について伺う機会はある。しかし、そうした演奏者や研究者を「支える」ことを専門にしている方の話を大学で伺う機会は、アートマネジメントという言葉が定着して久しい今日でもまだ少ないような気がする。その二者の交流・連携がもっとさかんになれば、若年層がホールを訪れないことに頭を抱えるホールの方々にも解決の糸口を提供できるだろうと思う。その意味においても、このフェニックスホールでのインターンシップが今後とも続いていくことを期待したい。

1.2 京都コンサートホール インターンシップ報告

[学生からの報告]

文学研究科 音楽学研究室 博士前期課程 1年 近藤美奈子
文学研究科 音楽学研究室 博士前期課程 1年 八谷誠人

◆京都コンサートホールについて

◇概要

京都市による世界文化自由都市宣言の具体化事業及び平安建都 1200 年記念事業として 1995 年に完成。大ホールとアンサンブルホールムラタ（小ホール）の 2 つのホールを擁する京都最大級のコンサートホールであり、京都市交響楽団の本拠地。シューボックス型の大ホールには、総ストップ数 90、パイプ総数 7155 本のドイツ・ヨハネスクライス社製の国内最大級のパイプオルガンを設置。

◇大ホール

オーケストラ演奏を主体としたクラシック音楽の鑑賞・演奏に最適なホールとして設計。

○座席数：1833 席（舞台背後に客席あり 174 席）、車椅子席 6 席

○間口：前 19.8m 後 16.2m

○奥行：12.6m（最大部分）

○楽屋数：個室 4 部屋（1 階・A～D）、小楽屋 2 部屋（地下 1 階・E, F）、大楽屋 5 部屋（地下 1 階・1～5）※インターネット接続可（Wi-Fi）

◇アンサンブルホールムラタ（小ホール）

室内楽・リサイタル等、小編成のクラシック音楽の演奏会や、合唱、ピアノ発表会を主な対象として設計。

○座席数：510 席、車椅子席 4 席

○間口：16.2m（最大部分）

○奥行：7.2m（最大部分）

○楽屋数：小楽屋 2 部屋（4 階・G, H）、大楽屋 2 部屋（3 階・6～7）※インターネット接続可（Wi-Fi）

◆インターンシップ実施内容概要

大阪大学大学院(2名)・京都市立芸術大学大学院(1名)合同インターンシップ

期間 2017 年 10 月 11 日(水)～13 日(金)の 3 日間

10 月 11 日(10 時～16 時)

- ・オリエンテーション
- ・施設見学
- ・文化政策、施策、指定管理者制度について
- ・公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団の施策について
- ・ホールの管理・運営業務について
- ・文化芸術の社会包摂機能について

10月12日(14時～20時)

- ・当日の公演の進行確認
- ・ケータリング準備
- ・チラシ挟み込み
- ・SNS、コンサートガイド記事執筆
- ・ゲネプロ見学
- ・受付、レセプションニストの対応見学及び体験
- ・公演プログラムの鑑賞

10月13日(10時～16時)

- ・昨夜の公演の反省会
- ・事業企画課の業務について
- ・「公演企画」について
- ・企画立案と疑似ミーティング

◆期間中開催の公演概要

○公演名：マキシミリアン・ホルヌング（チェロ） & 河村尚子（ピアノ）デュオリサイタル

○場所：アンサンブルホールムラタ（小ホール）

○日時：10月12日(木) 19時開演

○料金：一般 4,500円 会員 4,000円 学生 2,000円（全席指定）

○出演・演目：マキシミリアン・ホルヌング（Vc）、河村尚子（Pf）

ブラームス：チェロ・ソナタ第1番 ホ短調 op.38

シューマン：民謡風の5つの小品集 op.102

マーラー（ホルヌング編）：さすらう若者の歌

（休憩 15分）

ブラームス：チェロ・ソナタ第2番 へ長調 op.99

クライスラー：愛の悲しみ（アンコール）

キルマイヤー：フィガロのカプリス（アンコール）

○主催：オカムラ&カンパニー

○共催：京都市、京都コンサートホール（公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団）

○後援：村田機械株式会社

◆インターンシップ内容報告

◇1日目

○オリエンテーション

まず始めに管理課の鈴木さん、薩摩さん、事業企画課の佐藤さん、高野さんと私たち、そして京芸の原田さんの7人で挨拶と自己紹介。鈴木さんがこの仕事に至るまでの経緯など貴重なお話も聞かせていただいた。

京都コンサートホールは、京都市が出した世界文化自由都市宣言の具体化ならびに平安遷都1200年記念として、平成7年に建設されたホールである。今回お世話になった公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団が管理運営を始めたのは平成18年のことである、といった、ホールについての基本情報を教えていただく。私以外の二人は京都、そしてクラシック音楽と縁が深く、

何度も演奏会に訪れ、舞台にも上がったことがあったようだが、私は全く初めての訪問であった。

○施設見学

管理課の薩摩さんに施設全体を案内していただいた。磯崎新の設計によるもので、風水の考え方を取り入れているのが特徴である。例えば、それはロビー部分には十二支がそれぞれ割り振られた円柱のオブジェが配置されていたり、「気」の出入りを考えた出入り口の配置になっていたりというところに表れている。ホールは大ホールとアンサンブルホールムラタの二つ。ホールに向かい円を描くスロープには著名な指揮者や演奏者の写真が飾られている。長いスロープはこれから演奏会に行かんとするお客様方を、日常から非日常へといざなうための工夫であるそうだ。

大ホールでは中学校の合唱祭を行っていたため、残念ながらホールの裏側や舞台の見学はできなかった。このような学校による利用も多いという。国内最大級のパイプオルガンや、自動で昇降し、準備の時間とコストを削減することができるハイテク難壇についての説明を聞かせていただいた。

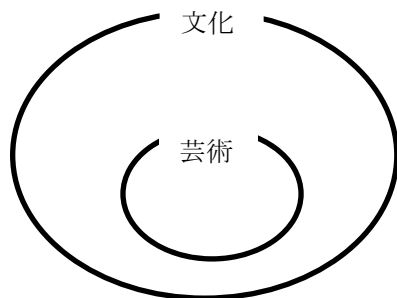
ムラタホールはソロやデュオのリサイタル、室内楽や合唱などに使われる小規模のホールで、六角形の形が印象的である。京都の建造物の高さ制限により天井の高さは標準より低めだが、そのぶん空間に広がりを持たせて音の響きは十分感じられるようになっている。こちらに関しては楽屋の見学もさせていただいた。

○文化政策、施策、指定管理者制度について

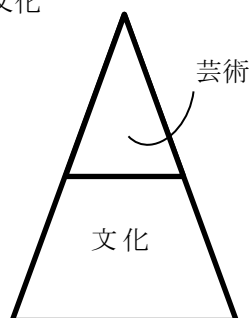
鈴木さんによる座学のコーナー。詳しいレジュメも準備してくださった。

まず導入として、「文化・芸術」「文化芸術」「芸術文化」の違い、そして「文化とは何か？」という議論から始まった。文化は生活文化と芸術文化に大別でき、文化芸術とは芸術も含む文化、芸術文化とは芸術を頂点とする文化を指している。

文化芸術



芸術文化



日本で文化について法制化されたのは平成13年。「文化芸術振興基本法」が成立し、文化芸術振興の基盤かつ根拠となるものが初めて法的に整備された。「文化の頂点の伸長」および「文化の裾野の拡大」、つまり文化の精華である芸術の一層の伸長と、同時に地域文化の振興を目指した法律である。この法律は平成29年6月に改正され「文化芸術基本法」となり、より幅広く観光、街づくり、国際交流、福祉、教育、産業なども含めた関連分野の施策が求められるようになった。

国が定めた大きな方針である政策に対して、それに基づき実行していくものが施策である。こ

ここでは京都市の具体的な文化政策について教えていただいた。京都市は昭和 53 年に「世界文化自由都市宣言」を発表しており、これを実現するために「京都市基本構想」を平成 13 年～37 年という長期スパンで打ち出した。現在は平成 23 年から始まったプランの第二期のうち、平成 28 年～32 年までの後期に位置付けられている。この第二期・後期のプランについて詳細に書かれたパンフレットが発行されており、そちらも別途いただいた。行政の発行物らしからぬスタイリッシュな表紙や、内容のわかりやすさ、実際に提案されている施策の多さ(その数 100 以上)に、京都の文化振興に関する気概を大層感じた。京都のような今も昔も魅力ある都市が、古くから持っている伝統に甘んじることなく将来を見据えていることに安心し、頼もしく感じた。

徐々にミクロな内容になっていき、最後は指定管理者制度の紹介であった。小泉内閣の際の「官から民へ」の施策の一環で、「公の施設」の管理・運営を地方公共団体やその外郭団体に限らず、営利企業、財団法人、NPO 法人などへも門戸を開くことにした制度である。3～5 年に一度改選があること、公募と非公募があることなど制度についての説明をいくつか聞かせていただいた。京都コンサートホールはこの制度に基づき公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団が管理・運営している。同様に財団は市内五つの地域文化会館についても担当している。京都コンサートホールやロームシアター京都の機能が「文化の頂点の伸長」であるならば、地域文化会館の機能は「文化の裾野の拡大」である。

○公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団の施策について

前項目の続きとして、財団の具体的な施策、おもに地域文化会館の機能について講義していただいた。ここでキーワードとなるのが「アウトリーチ」という概念である。「外に手を伸ばす」という、もともとは福祉の分野で使われていた言葉であり、文化会館の場合は館外における活動を指している。京都市のアウトリーチ活動は、地元意識、学区意識の強さに目を付けた地元密着型の活動を行っている。中でも今回大きく取り上げていただいたのはミュージシャンを老人ホームや保育園へ派遣する事業。派遣に関して交通費以外の金銭やり取りは一切発生しない。お金が動かないので、利潤という面では何も発生しないが、金銭価値とはまた違ったものが、ミュージシャンと聴衆双方にもたらされるのだとおっしゃっていた。また、こういった事業を通して地域の方々となりが生まれ、別の事業へ活かすこともできるという。

○ホールの管理・運營業務について

管理課の薩摩さんに、管理課の業務について詳しく説明していただいた。業務は大きく、貸館、施設管理、サービスの三つに分かれ、公演の担当や営業などから、施設の清掃、チケット販売、広報などまで多岐にわたる。ホールが貸し出されるまでの流れや、チケットの販売方法、会員サービスなどについても説明していただいた。舞台担当とレセプションは委託ということを知った。貸館やチケットには割引のサービスもあり、両方の面で顧客を増やそうとする工夫が感じられた。SNS も始動し、オンラインチケットサービスと共にインターネットでのコンテンツの充実にも挑む一方、高齢の顧客も多いため、窓口や電話での販売をやめるわけにはいかないというジレンマもあるようだ。確かにネットサービスの充実は一方でネットインフラの整っていない人々を排除することにもなりかねないので、バランスが難しいと感じた。

○文化芸術の社会包摂機能について

1 日目最後は、鈴木さんによる「社会包摂」という概念の説明。社会が成熟し、経済成長の陰で見過ぎてきたものに気付くようになってから、「社会包摂」について議論されるようになって

た。様々な生活困難を抱えた人たちを社会的に排除せずに、社会の構成員として巻き込むというのがその考えである。それにあたって、誰もが参加し、楽しむことができる文化芸術の力を使うことができるのではないか。聴いて、見て、楽しい、という段階を超えたものが文化芸術には求められ始めているのではないか。そのようなニーズに応えるのが、前述したアウトリーチ活動をはじめとする取り組みである。この考えは、舞台化、商品化された文化芸術が一周回って人々の身近なものとして帰ってくることを予感させ、非常に期待が持てるものであると感じた。

◇二日目

○当日の公演の進行確認

この日は夜の公演に向け一日のプログラムが組まれていた。まず集合しどのようなコンサートが行われるか、それにあたってスタッフは一日どのように動くかスケジュール表が配られ、確認が行われた。

○ケータリング準備、チラシ挟み込み

事業企画課チケット担当の日浦さんに教えていただきながら、楽屋のケータリング準備を行った。デュオの公演だったため、二つの楽屋で、飲み物のセッティングや、名前の掲示を行った。演奏家をお迎えするにあたって、少しでも楽屋での時間を気持ちよく過ごしていただけるように、とおっしゃっていたのが心に残った。

その後、ムラタホールの入り口に移動しチラシの挟み込み作業を行った。8人ほどで、30分強ほどかけて、来場予想者数 250 人分を挟み込んだ。小さいホールでもこれだけの量なので、大ホール公演の際はかなり大変なのだろうと想像できた。

○SNS、コンサートガイド記事執筆

ツイッター、フェイスブック、コンサートガイドに実際に使われる記事の執筆をそれぞれ担当させていただいた。SNS に関しては夜の公演の当日券情報、コンサートガイドは同じ「北山クラシック倶楽部」のシリーズの次回公演についてであった。

原田さんがツイッター、八谷はフェイスブック、近藤はコンサートガイドを担当した。コンサートガイドに関しては厳密な締め切り時刻が設定されていたわけではなかったので、ゆとりをもって考えることができた反面、印刷物として長く人の目に触れるということで一文字一文字にかなり気を使った。特に、キャッチコピーの部分がとりわけ難しく、短く、かつ公演やアーティストの特徴をしっかりとつかみ、興味を持たせる文章を毎月考えていることに感服した。

(ここまで近藤)

○ゲネプロ見学

当日の公演のゲネプロを 1 時間程度見学させていただいた。この日チェロのホルヌングさんの到着が 1 時間ほど遅れていたが、ホールの方々は慣れた様子で冷静かつ迅速に対応していた。ゲネプロ見学のためアンサンブルホールムラタに向かうと、すでにピアノの河村さんが音出しをしていた。舞台袖にはペットボトルが数本備えてあり、演奏者が音楽に集中できるようにとの配慮を感じた。

見学中にリハーサルしていたのはブラームスの《チェロ・ソナタ第 1 番 ホ短調》が中心。河村さんとホルヌングさんはロンドンのウィグモアホールでのリサイタルをはじめ、ここ最近共演を重ねているためか非常に慣れた様子で、ところどころ談笑も挟みつつリハーサルは非常に

てきばきと進んだ。

またこの日の公演はNHKの放送収録（12月8日（金）午前5時～5時55分にBSプレミアムの「クラシック倶楽部」で後半のプログラムを中心に放送された）を兼ねていたので、ゲネプロ時から客席の外周に沿ってカメラやマイクなど撮影・録音機材が3台ほど配置され、アングルなどの確認が行われていた。

○受付、レセプションの対応見学及び体験

開演30分前の開場の際して、近藤と八谷は受付での迎え入れとプログラムの受け渡しを、京芸の原田さんはホールへの誘導を体験した。最初にレセプションの方々とは打ち合わせを行い、例えば開演ぎりぎり到着したお客様は、少しでも早くホールに入れるようエレベーターに誘導していくことなどを確認しあっていた。打ち合わせといい、その仕事ぶりといい、てきばきとした動きに感服した。

プログラムをさばいてゆくのは、小ホールだったことや全席指定だったことから余裕があり、それほど大変ではなかったが、ときどき受け取らずに入っていこうとする人がいたり（プログラムが不要なわけではない）、チラシ抜きのプログラムを希望する人がいたり（別に用意してある）、クロークの場所を訊かれたりと、臨機応変な対応は求められた。

予ベルが鳴ると、私たちは鑑賞のためホールへと行かせていただいた。

○公演プログラムの鑑賞

ホールのちょうど中央あたりにある、おそらく視覚的にも音響的にもベストの席で、当日の公演を鑑賞させていただいた。予定では前半のマラーまでで帰宅することになっており、原田さんは前半で帰られたが、厚意により近藤と八谷は終演まで見せていただいた。

本番を見学してまず、リハーサルとの演奏のあまりの違いに驚いた。ブラームスの《チェロ・ソナタ第1番》は冒頭のテンポといい、ちょっとしたアゴギクといい、一つ一つのフレーズにこめられる熱量といい、ゲネプロでは出てこなかったものを次々と見せられ、舞台上の丁々発止のやり取りで音楽が生み出されてゆく過程が、ただ本番を見るだけよりも明確に見てとれた。

2曲目のシューマンが終わったあたりで、ちょっとしたトラブルがあった。この2曲で既にかなり音楽的なボリュームがあったからだろうか、前半のプログラムが終了して休憩に入ると勘違いした一部の観客が、席を立ててホワイエに出ていこうとしてしまったのだ。出ていこうとする人と座りつづける人との間で、なんとも気まずい雰囲気が場内をしばらく占めていたが、レセプションの方々から「まだ休憩ではございません」という声かけを行ったため、ようやく収まった。レセプションが、演奏会の進行をキープする最前線としてはたらいっている瞬間を見た心地がした。

前半・後半とも濃厚ながら感情過多には陥らない、絶妙なバランスの演奏会は、定番のクライスラーと、2016年8月に他界したドイツの作曲家キルマイヤーの可愛い現代曲を清涼剤として幕を下ろした。

◇三日目

○昨夜の公演の反省会

三日目のインターンは、まず前日の公演について、受付体験から演奏会の内容に至るまで、参加している3人とホールの方々で感想や意見を話し合うことから始まった。

○事業企画課の業務について

事業企画課の佐藤さん、高野さんから、事業企画課が実際にどのような業務をおこなっている

かを教えていただいた。その役割は演奏会の立案から手配・手続き、宣材やプログラムなどの制作、チケットの販売など多岐にわたり、多方面の人々を巻き込んで行われる仕事であることを実感した。

特に印象に残ったのは、ホールと音楽事務所との関係が、そのままテレビ局と芸能事務所との関係と平行になっているところであった。著名なアーティストは音楽事務所に所属しているし、海外のアーティストを日本に呼んで自分のホールで演奏会を企画するとなれば、そのアーティストと契約している日本の音楽プロダクション会社と契約することとなる。ホールには毎年音楽プロダクションからの売り込みがあって、そのなかからホールで行いたい企画を、予算や時期などさまざまな条件とすりあわせながら選択してゆくことになるという。その売り込みの際に、音楽プロダクションはどのアーティストが所属していて、どの海外音楽団体・アーティストがいつ来日する予定なのかなどの情報を集めた、ホール向けのパンフレットを作成するのだが、関係者以外が本来見ることのないそれらを今回は特別に見せていただいた。

こういった公演に加え、アウトリーチ活動を含む自主公演の企画もつくりあげてゆくとなると、事業企画課の仕事量や責任の重さはまさに推して知るべしといえる。

○「公演企画」について

事業企画課の高野さんから、演奏会の公演企画を立てるという仕事について、より具体的に座学形式で講義を受けた。

講義はまず、西洋音楽史上最初の「プロデューサー」といえるメンデルスゾーンと、彼によるマタイ復活上演の成功を分析することから始まった。その公演成功の要因として、バッハの忘れられた作品を見出した審美眼と、初演から 100 年ぶりというタイミングの狙いのよさ、巧みな広報、時代を見極めた観客目線を挙げて、それらがそのまま現代のプロデューサーにも求められる資質の一部になりうるということを指摘していた。

高野さんが挙げた現代のプロデューサーに求められる資質とは、①資金調達能力、②ビジネスに対する理解（商品としての音楽作品の見方もできること）、③マーケティング志向（ターゲット層の見極めができること）、④目利きの能力、⑤プロモーション能力、⑥リーダーシップの能力である。メンデルスゾーンがバッハを見出したことは④に、ちょうどよいタイミングで演奏会を開催したことやそれを利用した巧みな広報は⑤に、観客目線からバッハの作品にカットや改変を加えたことは②・③に相当しているといっていいたいだろう。

では、実際どのように企画は立案され、実行されてゆくのか。

企画を立てるのに重要な点は、5W1H すなわち「いつ」「どこで」「誰が」「何を」「なぜ」「どのように」行うのかに加え、ターゲットと予算を明確に計画することにあるという。予算は、収入（入場料、協賛金、助成金、広告収入、補助金、委託金）と支出（出演料等、会場使用料、広報・広告費、制作費（作編曲料、楽譜代、ケータリングなど）の試算を行ってつりあわせることが重要になるし、出演者やプログラムの決定に当たっては、情報収集を丁寧に行って、タイミングや集客、話題性、ホールとの相性・イメージ、面白さ、予算を客観的に慎重に検討する必要がある。また、公演名とキャッチコピーは集客や話題性に直結する点で重要である。この難しさは、ちょうど前日に SNS メッセージを考える際に味わうことができた。

チケットの料金設定にもさまざまな要素が絡み合っていた。ちょうど採算分岐点となるチケット料金を導き出し、企画に対する需要と供給のバランスを鑑みて、それに見込み利益を上乗せし、席種ごとに傾斜をつけて値段を設定する。また、電話・窓口・Web といった販売システムの手配と、話題性や広報力を意識した発売日の決定も欠かせない。

公演が決定すれば、各方面の手配・手続き・申請を済ませ、アーティスト等に対する出演交渉と契約、プログラムの決定、宣材・プログラム・アンケートの制作、DM 発送、チケット販売、打ち合わせと、さまざまな仕事に追われることになる。また、できるだけ費用を抑えて広報・PRを行うほか、パブリシティを狙ったり、予算の範囲内で新聞や雑誌に広告を打ったりする必要がある。

演奏会が近づけば、これらと並行して舞台打ち合わせ・事前打ち合わせをすすめ、細部を詰めてゆく。そうして私たちが見てきたリハーサル、受付や案内とつながり、やっと本番を迎える。終演すれば、その後も片づけや送り出し、SNS による告知、アンケートの回収・分析などを経て、一仕事が終わる、という流れである。

自分もアマチュアとしてコンサートを運営する人員の一部になったことがあるから、どんな小さなコンサートでも多くの人々・団体を巻き込む事業であることは理解しているつもりだったが、さすがにプロの世界となると人員の数にもそこで動く金銭の額にも、スケールが全く違って圧倒された。

○企画立案と疑似ミーティング

このような講義を受けて、私たちにはコンサートを立案し、それをプレゼンする疑似ミーティングで、いろいろな意見を頂戴するという課題が課せられた。お題は次の通り：「京都コンサートホールで、アマチュアから専門家まで楽しめる公演を企画してみてください。大ホール／アンサンブルホールムラタのどちらを使っても構いません。スケジュールや予算も考慮に入れませんが、ジャンルはクラシック音楽とします。」

近藤はアイルランドの伝統音楽とイタリアのバロックを交差させるという趣旨のハープ・リサイタルを、原田さんはフランス絵画と音楽を絡めるソプラノとピアノのデュオリサイタルを、八谷は吹奏楽の有名曲をオーケストラ（京響）で楽しむ演奏会を、それぞれ簡単な企画書にまとめてプレゼンした。それを受けて事業企画課の方々から、開催曜日・時間はいつを想定しているのか、その企画に合った効果的な広報の方法はなんだろうか、など質問を受けたり、企画内容に対する指摘を受けたりした。例えば八谷は、企画はさておき選曲がややマイナー・地味な曲に寄っていることや、大阪フィルハーモニー管弦楽団の過去の企画との重複を指摘された。

スケジュールや予算を考慮しないというかなり条件のゆるい中でも、「やりたいこと」「面白いと思えること」「多くの人に興味を持ってもらえそうなこと」「多くの人に聴きにに来てもらえそうなこと」のバランスを取るのが難しく、職員の方々の気苦労が偲ばれた。

（ここまで八谷）

◆所感

ともにインターンシップに取り組んだ二人とは違い、私にとって京都コンサートホールは今まで訪れたことのなかった場所であったが、実家の最寄り駅にも大きなコンサートホールがあり、本プログラム中は、終始そこを思い浮かべながら身近にコンサートホールが存在する有難みについて考えていた。今回学んだ社会包摂などの考えからもわかるように、ホールの方々は常に市民に上質の音楽を、気軽に届け、また最高の音響空間を演奏側としても利用してもらうことを考え、工夫を凝らした運営を行っていることが感じ取れた。合間にはスタッフの方々の略歴や仕事への思いも聞かせていただき、皆様の音楽についての愛情や、仕事に対しての誇りが感じられ背筋が伸びる思いであった。

私自身はここしばらく聴衆としても演者としてもホールのような大きい舞台から疎遠になっていたのだが、ホールはいつでも私たちに門戸を開いていてくれるのだと思出すことができた。市民にとって日常でもあり非日常でもあるこのホールという場所が、今後もより親しまれる場所であり続けることを願っている。(近藤)

実は、京都コンサートホールは私(八谷)にとって非常になじみ深いホールである。京都に下宿していたころは京響を(安い後半券で)聴くために通っていたし、学部生時代に所属していた吹奏楽団が毎年12月に催す定期演奏会は毎回ここで開かれていたから、「京コン」には何度行ったことかとても数えきれない。表舞台だけでなく、楽屋など裏方もほぼ知ったつもりでいた。ところがこのインターンを経て、そこで働く職員の皆さんからの視線で見ると、見知った「京コン」にまだまだ知らない社会的な側面が備わっていることが分かり、非常に興味深いとともに勉強になった。

またあの美しいホールに、何度でも戻ってこようと思う。それが一観客としてか、吹奏楽団がらみの演奏者としてか、どういう形かは分からないが、北山の地に根差して存在している「京コン」は、京都を離れて1年近くなろうという私の心中にもしっかりと根を張っている。(八谷)

2 演劇関係

2.0 兵庫県立尼崎青少年創造劇場（ピッコロ劇場）劇場制作演習

文学研究科（演劇学研究室）教授 永田靖

概要

演劇学研究室では、授業「劇場制作演習」の一環として、兵庫県立尼崎青少年創造劇場の協力のもと、劇場制作についての研修を行っている。2017年度は、兵庫県立ピッコロ劇団「ファミリー劇場」別役実作、森田守恒演出『赤ずきんちゃんの森の狼たちのクリスマス』を題材に、12月13日から16日（4日間、初日16日）の期間に実施した。

目的

「劇場制作演習」では、公立劇場での公演のリハーサル、ゲネプロ、初日を制作として研修することで、演劇上演の現場に触れながら、以下の諸点を学ぶ。①どのようなプロセスで演劇作品が初日を迎えるか。②（事前に学習しておいた）作品がどのように現実的に解釈され、物理的な諸条件（俳優の個性、劇場の規模、予算規模など）によってどのように細部が決まって行くか。③稽古最終日（ゲネプロ）と初日の本質的な違いは何か。④観客は作品をどのように受け取っていたか。⑤ピッコロ劇場は演劇作品をどのようなものと考え、どのようなものとして観客に提供しようとしているか。

これらのことを体験的に学ぶことで、ピッコロ劇場が地域社会にとってどのような働きをしているかを考察し、同時に広く演劇一般と劇場の持つ今日的な意義と課題について理解とビジョンを持つことを目的としている。

授業の進め方

年度当初にピッコロ劇場側と研修を実施する公演や日程、おおよその研修内容について相談し、1学期中には学生に案内する。その上で、まず研修受講生に対してオリエンテーションを行う。12月5日に実施したオリエンテーションでは、授業担当者（永田）が受講生に対して、ピッコロ劇場の創設の趣旨、特色、現在の活動状況について簡単に説明した上で、今回の作品と原作者、演出家、劇団の特徴を解説する。同時に今回の研修についての必要な心構えについて述べ、授業の狙いと何を主題として研修を受けるべきかを理解して貰う。

12月12日の演劇学後期授業「観劇実習」において、今回の上演作品である『赤ずきんちゃんの森の狼たちのクリスマス』についての作品分析を行った。研修受講生の6名はこの授業に出席し、ここでの演習を受けて作品理解を深める。

12月13日から実際にピッコロ劇場において研修を受ける。今回、作品の上演は塚口にあるピッコロ劇場ではなく、西宮北口の兵庫県立芸術文化センターにおいてであり、研修の3日目からは芸術文化センターにて研修を受ける。また演劇学演習「観劇実習」受講者が初日を観劇する。インターンシップ受講生はすでに劇場内において制作業務を実施しており、研究室の学生たちを観客として受け入れる仕事を行う。普段教室内では同じ立場にいる学生たちが、初日にはそれぞれ制作者（受付、チケットもぎり、場内案内者など）と観客という異なる立場に立つことで、演劇公演という「出来事性」（ヴィルマー・サウター）についてその一回性、約束性、社交性について認識を深める。

観劇と研修終了後に、授業「演劇学演習」において、インターンでの経験について、劇場の概

要、作品の特徴、劇団の方向性などについて簡単に報告し、ディスカッションを行う。制作者の立場から見た演劇上演と、観客の立場から見た演劇上演との違いについて、相互に議論し、上演作品の芸術的特徴が、立場の違いによっていかに異なったものとしてあるのかを理解する。

成績評価

最終的に、インターンシップ参加者全員はインターンについての報告書を、それ以外の観劇者（学生）は観劇レポートを執筆する。授業担当者（永田）はそれらによって成績評価を行い、インターンシップについての報告書は完成した後に、劇場側に提供し、劇場の活動のために役立ててもらおう。

謝辞

今年度もピッコロ劇場制作部の皆さんには大変お世話になりました。お陰様で有意義な研修になりました。受講生は皆充実した研修であったことに大変満足しております。次年度も何とぞよろしくお願い致します。

2.1 劇場制作研修 受講生のレポート 1

〔学生からの報告〕

文学部 2 回生 演劇学専修 佐藤勇輝

1 日目

まず最初に、ピッコロ劇場の新倉さんから今回の研修の説明を聞いた。事前に定めていた、効率の劇団、アーティストを抱える公立劇場の意味・使命を理解する事に加えて、そこで働き、関わる人たちがどういった思いを抱いているかを考えていく事に焦点を当ててインターンシップに臨もうと考えた。今回の研修について 1 つ 1 つ説明を聞き、それぞれにどのように参加していくかを準備することが出来た。

研修説明の後、劇団公演のチラシ折込のお手伝いをさせていただいた。各公演でどういったチラシを配布しているかなどをうかがった。この作業は、ピッコロ劇場で働く方が毎回行っている。(チラシの折り込みテクニックも教えていただいた)

その後、県職員の吉森さんに事業概要をうかがった。ピッコロ劇場の近く、電車でわずか 2 駅の場所に、兵庫県立芸術文化センターがある。2017 年現在、ピッコロ劇場が 39 年目、それに対して芸術文化センターは 13 年目。ピッコロ劇場は、県民、市民に使ってもらいやすい施設をコンセプトに運営されている。芸術文化センターは大規模な公演が行われることが多く、プロの劇であったり、オペラが上演される。距離が近い 2 つの施設だが、機能的すみ分けがなされているという。ピッコロシアターの設定の背景についてもうかがった。ピッコロシアターが設立される数年前から、兵庫県では大企業から超過課税を行っていた。そのような中で、働く青少年が求めるものは何か、実際にアンケートを行った。その結果、青少年が何かを創り上げる施設が造られることになった。それがピッコロシアターだという。ピッコロシアターは、舞台スペースと客席が 2 : 1 ということからわかるように、演じる側に力を入れている。また、実際問題運営していくことも考えて、規模が小さいことで、「客席が埋まる」ようにもなっている。施設の利用料金は安く、バンド練習など、アマチュアの人にも開放されている。芸術・表現・創造活動のみに開放されていて、会議などは受け付けていない。防音設備は充実していないが、苦情などもないという。利用率は 90%を超えている。ピッコロシアターの課題としては、バリアフリーが充実していないことなどがあるという。

ピッコロシアターが地域をより良くするといった活動の 1 つ、ワークショップ「みんなの尼崎大学」に参加した。ピッコロ劇団員の方を中心に、参加者は 30 人前後、年齢層は、20 代から、定年退職された 60 代の人があった。今回、第 14 回のテーマは「日々の暮らし演劇を」であった。内容は、順に、2 人一組になって行う「後出しじゃんけん」にはじまり、停止した一方の人をもう一方の人がテーマに沿って自由に動かし、それが何を表しているかみんな当てるといったものなども行った。これらは、演劇の基礎となる、自分と他者を空間的につかむ訓練だそう。次に、3 つのグループに分かれてシーンを作り、その当てあいをした。複数人で一つの場面が出来上がるということ、肌で感じる事が出来る内容であったと思う。最後に、テーマごとにグループ分けをし、ディスカッションを行った。“なぜ芝居を見に行かないのか”というテーマに私は参加した。そこでわかったことで、意外にも芝居を観に行かなかった人がワークショップに参加していたということがある。のちに職員の方がおっしゃっていたのは、参加を募集したのが、主に役所であったため、参加者は役所を訪れる機会があった人が多く、決して演劇に通じた人ばかりではないという。こういった事実から、ピッコロシアターの、公立劇場としての役割、演劇に興味のない人に演劇に触れてもらう機会を作る、ということは果たせていた。デ

イスカッションでは、そういった人たちの生の声を聴くことができ、演劇はチケット代が割に合わない、公演情報をみんなが入手できる環境にない、敷居が高いなど、演劇に触れられづらいとされるのが明らかになっていった。他の参加者の気持ちや反応は、事前にそう定位していた、演劇にとっても興味がある人とは異なっていた。

2日目

最初に、ピッコロシアターにて県職員の田房さんから、劇場事業についてお話を聞いた。田房さんもピッコロシアターが“公立”劇場であることを軸としてお話しされていた。公立劇場として、商業的というより、何をしたらピッコロシアターらしさがでるか企画するのがお仕事だとおっしゃっていた。演劇とは他者に気づくことだとお話しされた上で、劇場がどうすれば魅力に感じてもらえるか、常に考えていくことが大切だとおっしゃった。何を上演するか、買い公演については1年以上前から決めておかないと、会場がおさえられない。どの作品をやるか、一人でも多くの客を集めることも、公立劇場においても考えなくてはならない。そういったことを考えていく中で、広報・営業、また劇団員といった同僚とどのように仕事をうまくつなげていくかが大事であるという。例えば、落語などはセットがいらないためコストが安く、「〇〇周年」だったり、売れそうな人だったり、年男など、いわばネタになりそうな人を呼ぶことで、新聞に載りやすくする。日常的にこういったことにアンテナを張っているという。何か新しいことをするにあたって、せめぎあいがおきる。お金の問題である。買い公演の場合、劇団員の交通費、宿泊費は県費や外部の助成金でまかなわなければいけなくなったり、近隣の劇場とのカラーを意識しなければならないという。「青少年の自由な創造活動を促進し、あわせて県民文化の高揚を図る」といったコンセプトを基に、芸術文化活動の普及啓発も盛んだ。客席と近いため反応がわかりやすいことから、プロの若手の演奏家などには好まれる施設だ。あくまでピッコロシアターは“場所”だけを提供し、企画・制作はアーティストに任せる。ピッコロ演劇学校、ピッコロ舞台技術学校も、そのような“若手”人材育成の養成を図っている。これらは、あくまで地域文化の活性化を目的としている。ピッコロ劇団が設立された翌年、阪神淡路大震災が起きた。その時の活動経験が今も軸になっていて、小学校を回る「お出かけステージ」など、震災当時のノウハウが生かされている。災害時には現地へ向かうこともあるという。避難所を回り、子供たちのストレスの解消に役立っている。

次に、新倉さんに進路・就職についてお話を聞いた。新倉さん自身、演劇にかかわりたいという気持ちから、今の職にたどり着かれた。転職率が高い今の時代で、自分のやりたい仕事は、時間がかかっても見つかるし、それに就くのは自分次第なのだなど、感じた。

二日目の最後に、演劇学校の授業を見学した。演劇学校は、本科・研究科があり、両方を見学することが出来た。研究科は、本科修了者や他の養成機関を終了した人が対象で、各人の個性と能力発展を目指し、さらに高度な演技術。劇団立ち上げのノウハウを学習するコースだ。そこでは、マイム俳優のいいむろなおき氏が講師として教えていた。内容は、どうやったら相手が自分の思い通りに動いてくれるか、体に少し触れただけでどこまで相手の情報を読み取れるか、相手に体重を預け舞台上で安心できるか、空間手的に3者間の距離を把握し、それをコントロールできるか、といった内容を、段階的に体を動かして訓練していた。参加者は20代が多く、中には30代、40代の人もいた。本科の授業では、最初に筋トレ、ストレッチを行っていた。背筋をしながらできるだけ大きな声を出す練習が印象的であった。そして次にそれぞれが思う楽な姿勢で音楽を聴き、感じた、思ったことを発表するという練習が始まった。さらに発展し、音楽を聴いて、思うように走ったり跳んだり、自由に動く、イメージを形にするトレーニングに移った。生徒は

ほとんどが 20 代、30 代とみられた。演劇学校は 18 歳から 35 歳まで参加可能で、教員や文化活動をしている人は年齢外でも可能だ。時間帯も会社や学校が終わった後で、週に 2 日であり、様々な人が受講しやすくなっている。

3 日目

芸文センターで場当たりを見学した。上演前日ということで、舞台装置は完全にそろっていた。場当たりでは出演する子供たちの代わりに、子供たちに指導するピッコロ劇団員の方が立ち回りをしていた。場当たりでは、演技の確認というよりも、特に舞台装置の確認が行われていた印象を受けた。その後、ピッコロシアターへ移動し、ピッコロ歴 14 年の職員古川さんに広報・地域交流についてのお話をうかがった。かつては、ピッコロシアターでは広報に多くの費用をかけるという感覚はなかったという。少しずつキャパを埋めるためにはどうすればよいかを考えていた。しかし、SNS が普及した時代になって、半年ほど前からツイッターが開始された。そこにも、常に発信しないと何もしていないみたいだということと、忙しいと発信する時間がないということのせめぎあいがあった。劇場の公共財としての社会的役割、存在意義をいかにして発信していくか。どうやったら観る人が増えて社会が豊かになるか。それを考えるのが、公共財ピッコロシアターの広報の役割であるという。そこには民間の、利益のためのたくさんの集客とは対照的な姿勢があった。他にも、劇場に来れない、来れない人に向けてどうアプローチするか。障がいを持った人、また不登校などで教育、福祉に責任があるとされている子供たちにも範囲を広げている。実際に不登校の生徒が、フェスティバルに参加して学校に行くようになったこともあるという。広報にもまた“せめぎあい”があり、文化庁から助成金をもらえることでできることが広がる一方で、やらないといけなことが増え、結果お金は増えているわけではない。むしろ、なにか失っているのではと古川さんはお話しされた。劇団を持っている劇場は少ない。そういった劇場だからこそできることがある。劇団員と、上演の性格を考慮して広報の方法を、記者会見にするか、新聞社を回るか、など即座に相談できる点もメリットだ。音声ガイドのタイミングなどもその一つである。念入りに確認しないと、ネタバレや、笑いのタイミングをずらしてしまいかねない。地域交流として、学生だけでなく、社会人も研修生受け入れを行っている。また、近隣の大学の建築学科の生徒に、劇場見学を開放している。地元の図書館とも協力していて、公演に合わせたフェアも依頼している。

その後、「舞台芸術学校オープンキャンパス」に参加した。去年は実際に機材に触ることはできなかったが、今年は触れることが出来た。はじめに舞台の解説が行われた。舞台のそれぞれの名称から、現場でひとつひとつ説明を聞くことが出来た。次に、美術の説明があった。実際の美術道具を見ながら、どのように組み立てられていくか過程も見ることが出来た。音響については、各セクションとのタイミング合わせ、的確な音の調節方法などを聞くことが出来た。説明が終わり、3つのパートに分かれてそれぞれを体験する機会が設けられた。舞台パートでは、ドライアイスの発射、紙吹雪の散らし、幕引きなどを体験できた。ドライアイスの噴射はある程度力が必要で、少し大変な作業に思われた。各セクションとインカムマイクで連携を取りながら、音響は適切な音を、美術は照明を合わせて舞台に雰囲気を作り出していった。参加者は 10 代の学生が多く見られた。ほとんどが進んで体験に参加し、気になる点は質問などしていた。

4 日目

公演当日は、芸文センターにて、はじめに子供稽古の見学をした。当日にも、変更点・改善点はいくつかあり、それが子供たちにも求められていた。演出も、子供たちを他の俳優と同等に接

しており、子供たちもやはりオーディションを受けてきただけあると感じた。80分の公演に対して、ゲネプロで時間も長くとられていたため、ほとんどを見ることが出来た。その後、開場業務に就いた。当然のことだが、公演内容を正確に把握し、施設についてもすべて説明できないといけない。実際に、事前に確認した内容をお客様に説明することが多かった。その際にも、芸文センターの職員さんのお話を聞くことが出来たが、やはりピッコロ劇団・劇場の公共財としての役割、また震災を経験して持ったノウハウについて強くお話しされていた。上演が無事終わり、客出し業務で、今回の公演にかかわる子どもの数を実感することが出来た。そのため、特にお客様に楽しい気分のまま帰っていただけるように心がけた。そして、職員の皆さんもそれを心がけていらっしやった。

研修を振り返って、いろいろな人からお話を聞くことが出来て本当に貴重な体験だったと感じた。県職員、財団の方、ピッコロ劇団の方、また芸文センターの方。やはり皆さん一貫して、公共財としてのピッコロシアター・ピッコロ劇団という意識を持っていた。ワークショップに参加して、一般の人の反応を近くで感じて、その役割は果たされているということがとてもよく分かった。中でも、「みんなの尼崎大学」は年齢を問わず演劇を純粹に“楽しい”と思える機会であり、その後職員の方と、「とても価値のある内容だった。またみんなでより良いものを考えていきたい。今度は学校からチームを募ってはどうか」といった話をしているとき、常に公共財、演劇の普及に進んでいく姿勢が感じられたのが一番印象的であった。

2.2 劇場制作研修 受講生のレポート2

〔学生からの報告〕

文学部2回生 演劇学専修 山内日菜子

2017年の12月13日から16日まで、兵庫県立尼崎青少年創造劇場(ピッコロシアター)と兵庫県立芸術文化センターで行われたインターンシップに参加した。元々大学の劇団サークルに加入していて、素人ながらも演じる側に立つことのある自分にとってプロの現場が見られるのはこれ以上ない機会であった。将来のことはまだ未定だが、劇場の仕事にも少なからず興味がある。しかし実際に体験したり話を聞いて、それ以上に教わったことは大きかった。

1日目は13時にピッコロシアターに集合した。今回は私の他に同学年2人と先輩方3人の計6人で、例年より多いとあちこちで驚かれたのを覚えている。最初はとても緊張していたが、担当の新倉さんをはじめとする職員の方々が温かく迎えてくださり、とても安心できた。まず挨拶を済ませ、新倉さんから今回のインターンの概要を聞いたり施設の案内もしていただいた。ピッコロシアターは今年で40年を迎えると聞いている。確かに年期は入っているように見えるが、しかしだからこそ温かみがあり親しみやすい雰囲気を感じる。概要を聞いた後、早速週末に行うピッコロ劇団の公演パンフレット挟み込みの手伝いをした。ピッコロシアターで行われる他公演のチラシや、ピッコロシアターに併設されている演劇学校、舞台技術学校の案内なども挟み込まれていた。膨大な量で時間もかかったが、サークルの話、今の阪大の話、職員さんの昔の話など、新倉さんやほかのスタッフさんとも色々話をして親睦を深めることができた。

その後、営業部長の吉森さんから、ピッコロシアターのこれまでの歴史や事業概要についてお話をしていただいた。一般の方向けのパンフレットからこれまでの活動を詳細に記録した資料など、多くの資料が配布され、目を通すのに苦労した。吉森さんからは、特に公共劇場としてのピッコロシアターの役割について教えていただいた。

ピッコロシアターの正式名称は「兵庫県尼崎青少年創造劇場」。名称の通り「青少年ための劇場」を目指されている。観る側はもちろん、「作る側」により使ってもらいやすいように工夫されている。観客側にとって使いやすい、新しく綺麗な公共ホールはたくさんあるが、「作る側にとって使いやすい施設」という発想は全くなかった。「良くいえば多目的、悪くいえば無目的」という言葉通り、学生劇団やピアノの発表会、また若手のプロの演奏場など幅広い用途で使えるように、各ホールは広いステージに対して座席数が少ない、彼らにとってちょうどいい広さである。「演じる側が本当に届けたい人に贈るための施設」であるともいえる。そこが商業目的の大型劇場と異なる点だろう。専門職の人と公務員職の人が一緒に働けるような経営体制も興味深かった。

休憩を挟んだ後に「みんなの尼崎大学」のオープンキャンパスを見学した。「みんなが先生、みんなが生徒、どこでも教室」をモットーに、「大学ごっこ」形式で、様々な人と学びと活動をつなげる場を提供する場である。ホームページをのぞいてみると、いずれも先生は特別な肩書もない一般の人が多く、皆「地域の活性化」に貢献している人々ばかりで、内容も非常に面白そうなものが多かった。行動力のある彼らが経験を通して得た「気づき」が私たちの視野を広げるきっかけを与えてくれる。オープンキャンパスでは事業の説明やピッコロシアターの説明があった後、ピッコロ劇団員によるWSが行われた。演劇とは知らない人や物に出会うことで他者に「気づく」こと。芝居をしたことがない人も簡単にできるもので、体を動かし、表現することの

楽しさを知ってもらうのが目的であった。また、ピッコロ劇団にしてほしい作品や演劇をめぐる問題についてのディスカッションも行った。芝居を見たことがないという人も多くいたのが驚きだったが、とても参考になった。

2 日目はまずは田房さんという方から劇場の事業概要、主に制作に関するお話から始まった。実際に作品をどのように選び、本番までにどのように発信していくかということである。まず私たちに問われたのは「観る舞台は何を基準に選ぶか？」である。私も含め、みんな個人の趣味だったり家族で見に行く人が多かった。このように一人ひとり趣味や興味が異なるので、「どんな作品を選ぶか」が第一の問題となるのだという。最低でも1、2年前から、場合によっては構想段階で何年もかけるというから驚きである。そして作品が決まれば次は「いかに客を呼ぶか」が問題になる。一人でも多くの人に見てもらえように、「どのタイミングで、誰に、どんな風に発表するか」を考え、常にアンテナを張り、イベントなど使えそうなネタを集めなければならない。ここで必要なのが「横のつながり」であると田房さんは語ってくれた。人や地域との結びつきを持っておくことで、効率的かつ効果的な宣伝ができるのである。劇場ではほかにも、年間行事や流行りなどを利用して客を呼び込む活動をしており、その地域とのつながりを大切にする所がピッコロらしさなのだろう。

次に、新倉さんからピッコロ劇団について、そして、進路・就職について教えていただいた。ピッコロ劇団のなりたち、年間の公演、ワークショップなどの活動、また震災における活動など、様々な取り組みをしていた。特に劇団にとって被災地激励活動は大きな出来事だった。ピッコロ劇団が誕生して1年もたたないうちに日本を襲った阪神淡路大震災において、彼らは「自分たちには何ができるか」を考え、各地域への現地調査をもとにして、短い即興の寸劇やWSなどの被災地激励活動を開始。この経験をきっかけに、ピッコロ劇団は積極的に外に出ていくようになり、後の東日本大震災や熊本地震における激励活動にも役立った。被災地での演劇活動は、「衣食住では得られないもの」、つまり「生きる力」を与えてくれる。実際、現地の子供達も喜んで参加してくれたし、現在でもピッコロシアターの役目の一つであると思う。元々「働く人が楽しくすごせるように」できた施設でもある。

また外だけでなく、内部での「つながり」の大切さも教えていただいた。劇場は組織であり、チームなのである。私も劇団に入ってチームの大切さを学んだ。結果を出すために一人では無理であり、いかに同僚と協力していけるかが大事なのだ。また公共の劇場では公募がほとんどないため、新卒はほとんどおらず転職の方が多いという。そのため様々な経歴の方が集まっていて彼ら一人一人の経験がピッコロシアターの事業をさらによいものにしていく。

自分が経験したことが将来どこでどう役に立つのかなど、その時にならないとわからない。だから、当たり前なことなのだが一度経験したことはしっかり記憶にとどめておくことの大切さを改めて痛感した。そして多くの、そして様々な経験を通して初めてやりがいのある仕事を見つけることができるのだろう。演劇をやっている者として卒業後はそれに少しでも関わられるような仕事をしてみたいという思いはあるものの、まだ未定である。しかしどんなことになるだろうとも、「人とのつながりを大切にする」という言葉はずっと胸にとどめておきたい。

夕方にはピッコロ演劇学校の授業を見学した。参加者の年齢も下は高校生っぽい子から上は中年の方まで幅広い。プロの養成学校ではなく、演劇活動のスタート地点として、演劇に触れ、地域の人が豊かな生活を送れるようにするための学校なのだということがよくわかる。本科では主に劇団ピッコロの講師が、研究科では外部から先生を招いていた。筋トレなどの基本的なことから発想力や身体表現を鍛えるWSなど、演劇に関する様々な講座が行われていて、とても楽し

そうであった。しかし見ていてわかるのは、みんな演劇初心者なんだなということである。12月だったのでみんな慣れているかもしれないが、何となくそう思う。あくまで「演劇活動のスタート地点」として演劇に触れ、また地域の人が豊かな生活を送れるようにするための学校なのだということがよくわかる。老若男女問わず、何かを表現することの楽しみを知ってもらう、というような印象である。

3日目は兵庫県立芸術文化センター(以下、芸文)の方へ集合した。ピッコロシアターからわずか2駅先の芸文は築10年目でまだ新しく、洗練されたお洒落なデザインであった。「作る側」を意識しているピッコロシアターと異なりあちらは大規模なプロ向けの劇場で、距離が異様に近くても大丈夫なのは、そうした住みわけがしっかりされているからだという。次の日に初日を迎えるピッコロ劇団ファミリー劇場「赤ずきんちゃんの森の狼たちのクリスマス」の場当たりを見学させてもらった。ここで気づいたのは、これもまた当たり前のことだが、実に多くに人々が芝居の製作に携わっているということである。演出だけでも4人と演出助手と補佐、舞台監督や照明、音響、歌の講師さん。私の劇団でも人数が割と多く、みんなで協力して舞台を作っているのだが、さすがプロというべきかスケールの違いに圧倒されるばかりであった。緊張感の漂う現場は非常に刺激的だった。

その後ピッコロシアターへ戻り、広報担当の古川さんから話を伺った。ピッコロシアターの広報担当は彼女しかないと言うから驚きである。外と内を繋ぐ窓口として、重要な存在なのだろうということがよくわかる。これまでも散々言及されてきた、ピッコロシアターの存在意義について、語っていただいた。ピッコロシアターは「公共財」であり、利益を重視する民営の劇場とは大きく異なる。地域の人々がより芸術を身近に感じられるように様々なことに挑戦し、試行錯誤できる。すぐに結果が出るわけではないが、困難な目標ほどすぐに結果が出ないのは当たり前のことだと思う。「劇場に来ない(来れない)人に思いを馳せて仕事をしている」、という古川さんの言葉もまさにピッコロらしい考えだった。

次にピッコロ舞台技術学校のオープンキャンパスが開催されるということでそちらの見学に行った。希望者は予想していたよりも多く、会場前で熱心パンフレットを読んでいた。初めて授業の見学でなく設備を本格的に仕込み、舞台美術、照明、音響の3つのパートに分かれて体験プログラムが用意されていたが、人数が多かったせいか個人的には少々効率が悪かったように見える。実際に機器に触れられるのはかなり面白いし強みであると思うが、もっとバリエーションを増やしたり、舞台に役者をつけても華やかになるのではないかと思う。また面白いのは、本当に演劇の基礎の基礎から教えてくれるということである。確かにいざ演劇をしたいと思っても、スタッフワークについてしっかり学べるようなイベントや施設などほぼないであろう。ホール自体は古いかもしれないが、設備は最新のものが揃っていて、興味はあるものの機会がなかったという人々にも機会を与えてくれる。演劇学校と同様、プロを目指すばかりでなく地域との交流の懸け橋となるための学校であるイメージが強かった。

4日目は午前中に芸文に集合し、その日に本番を迎える「赤ずきんちゃんの森の狼たちのクリスマス」の制作業務の説明を受けることから始まった。インターン生6人はチケット列への誘導担当、差し入れ預かり担当、クッションの受け渡し担当に分かれ、私はクッション受け渡し担当についた。その後子供たちの稽古があったので、それを見学した。気づいたのは、子供たちかなり舞台に慣れていたことである。大人の意見をよく聞き、急な変更点にも迅速に反応できる。小さい子供にそこまでできるとは思えない。後で聞いた話だと、そういうことになれる子供が

多いという。

休憩の後、会場準備に入った。14時受付開始、14時半開場、そして15時に開演する。今回は「ファミリー劇場」なだけあってお子さんが多くそのための場内整理などが大変そうだった。特にロビーで演奏者によるウェルカムコンサートからの入場、という流れを取っていたため非常に混雑した。これはアルバイト先で学んだことなのだが、インターン生であっても、客からすれば私たちは他のスタッフの方々と何ら変わらない立場にいる、ということを常に意識して接客できたと思う。子どもたちの笑顔が私たちにも笑顔をくれた。幼い頃からこうして演劇という芸術に触れられるのはとても意義のあることだと思ひ、もっと多くの子どもたちに見て欲しい。そして少し羨ましかった。

このようにして、4日間のインターンシップはあっという間に終わってしまった。一番印象に残ったのが、ピッコロシアターや劇団の「存在意義」と「外部への積極的なアプローチ」

であった。積極的に外に出向き、演劇を通じて豊かな人材を育成することを重要視している。公共劇場としての存在意義を常に意識し、ピッコロならではの「地域性」を大切にしている。これからも地域と芸術をつなげる懸け橋として活躍していくのだろう。

ふと平田オリザ先生の「演劇教育」に関する授業を思い出した。今学校教育で演劇的要素を取り入れたWS形式の授業が流行っている。海外では学校での演劇の授業は当たり前にあるが、日本での演劇の授業の機会は今までほとんどなかったと聞く。

私は演劇の持つ「生きていく力」を大いに信じている。たかだか大学の演劇サークルでも私は様々なことを学べたし、またピッコロシアターの被災地での演劇活動などもこれを証明している。古川さんは今日本を襲う社会的な問題の中に、演劇が解決できることだってあるかもしれないとも言った。演劇を見るだけ、するだけにとどまらない新しい、そして正しい演劇教育の在り方を模索し、ぜひ広めていって欲しい。今すぐ効果が期待できるわけではない大変な使命だが、公共劇場だから背負えるということもあるし、きっと子供たちの、ひいては日本の未来につながっていくと私は思う。これからの研究のテーマとして検討している。

欲を言えば、演劇学校の生徒やピッコロ劇団員がどのような思いを持ってここにいるのか、そして実際どんなWSをしているのかの具体的な話を直接本人に伺ってみたかった。しかし今まで私にとって演劇は趣味、あるいは研究対象の範囲にしかなかったが、研究室やサークル活動では決して学びきれない、実際に仕事として演劇に携わっている人々の「プロ意識」を、断片的にはあるが垣間見ることのできた貴重な4日間だった。ありがとうございました。

2.3 劇場制作研修 受講生のレポート 3

〔学生からの報告〕

文学部 2 回生 演劇学専修 横井温子

12月13日から16日にかけて、ピッコロシアターにてインターンシップに参加させていただきました。研修中は現場で働いている方々から業務について具体的なお話が聞くことができたり、実際に稽古や講座を見せていただけて、劇場で働くとは具体的にどのようなものであるのかイメージが湧いた。これから私が学んだことについて述べながら、感じたこと考えたことを交えて書き進めていこうと思う。

まず、今回お世話になったピッコロシアターについてだ。正式名称を兵庫県立青少年創造劇場と言い、その名の通り芸術利用に目的を絞っており、当時全国にできていた、ともすれば無目的になり兼ねない、多目的ホールとは一線を画している。舞台袖、舞台奥を含めれば客席の二倍の広さを持つ大ホールや、キャパが小さめで気軽に利用しやすい中、小ホールなど、演じる側にとってとても使いやすい設計になっている。築約40年にもなるため、防音システムはなく、ホールや練習室の音が干渉しあうこともあるが、その使い勝手と良心的な価格から、貸館業務やピッコロ劇団の活動を合わせると年間稼働率は90パーセントになり、それだけ地域に求められていることが伺われる。

ところで私は現在、大阪大学アカペラサークル *inspiritualvoices* に所属している。先日、尼崎アルカイクオクトホールにてサークルライブという、一年間の活動の集大成としてサークル員250名が一丸となって作り上げるライブイベントを行なった。私も演者としていくつかのグループで舞台に立った。正直に感想を言うと、アルカイクホールは箱感がとても強く、最前列の観客とでさえ距離感を感じてしまった。また客席の傾斜が非常に緩やかでキャパが500であるにも関わらず、何だかスカスカ感というか物足りなさがあった。最後にサークル員全員が舞台上に上がり全体曲を歌う場面でも、入りはけはなかなかごちゃついており、比較してみると改めて、いかにピッコロシアターが演じやすいという点に重きを置いた劇場であるか実感した。

先ほどはピッコロシアターの使いやすさに着目したが、次に公立劇場としての側面に注目したい。

私立(民間)劇場のミッションはたくさんの客を入れて収益を得ることであり、劇場に元々来る人がターゲットである。一方、公立劇場のミッションは普段演劇を見に来ない人たちに劇場に来てもらうことである。同じ財団が携わる公立劇場に震災復興のシンボルとして建てられ、大規模の舞台で大中小ホールがそれぞれ2000、1000、600のキャパを誇る兵庫県立芸術文化センターはプロの芸術を見てもらう場であって、公立でありながら民間的な要素が必要になってくる。

その点、公立劇場であり、かつピッコロ劇団という公共財としての劇団も持っているピッコロシアターだからこそできるアプローチがあるのだ。普段劇場に来ない人に思いをはせ、行なった取り組みの一つが、視覚障害者の人にも演劇の様子を伝えるべく音声ガイドを作ることである。私たちが観賞した『赤ずきんちゃんと森の狼たちのクリスマス』は夏にピッコロシアターで公演されており、その際導入されたそうだ。劇場所有の劇団だからこそ新しい取り組みにもかかわらず、台本や稽古を見ながら、そして演者からの意見を取り入れながら、セリフや音楽の邪魔をしない最低限のナレーションで状況伝えるものを作ることができたのだろう。言葉選びはとても難しく、中途失明の方に「赤い布」は通じるが先天盲の方にはどんな色なのかは想像がつかないなど、もちろん課題はあるだろうが、間違いなく新たな層が演劇の魅力に引き込まれる取っ掛かりになったと思う。

劇場に来ない人に思いを巡らすことは、利益には直結しないかもしれず、また結果がすぐに出ないものであるが、だからこそ面白さがあると仰っていた。

続いて参加させていただいた中から特に印象的で、今回初めてコラボレーションした取り組みであったみんなの尼崎大学について述べたい。プログラムにはバックヤード見学やピッコロ演劇学校の講師による演劇体験、ディスカッションなどがあり、演劇を身近に感じる工夫があった。

演劇体験では、全員で円になって手を順番に開いたり閉じたりする、恥ずかしがり屋でも取り組みそうなものから、二人一組のじゃんけんゲームなど、段々とレベルアップしていった最終的にはみんなで協力してお題に合わせたワンシーンの表現に挑戦した。演劇の基本である、自分の体を思い通りに動かせること、相手の動きをよく見ること、相手の動きを受けてリアクトすることを短時間の中に何度も実践できた。「イエスアンド」という言葉を先生が何度か仰っていたが、私たちがどんなアイデアを出しても否定することなく、そこから想像力と創造力を働かせるのがさすがだと感じた。これを意識することは演劇だけにとどまらずどんな場面にも応用できるので、企業などにも講座を開いているのにつながるのだと納得した。

また、ディスカッションでは、様々なテーマに分かれたが、私たちは演劇のイメージアップ大作戦として、どうやって演劇を見に来てもらうかについて話し合った。

今回の『赤ずきんちゃんと森の狼たちのクリスマス』のようなファミリー劇場は子供たちに演劇に興味をもってもらえる機会であり、彼らの親世代、祖父母世代が劇場に足を運ぶ契機ともなる。また、今は小学校などでも授業などにも取り入れられていると聞く。

問題は丁度思春期に入り、色々と難しくなるお年頃である中学生高校生大学生である。勉強や部活、サークルがあると学生のバイト代ではなかなか貧乏で、頻繁には見に行けないだろうし、世の中には他にも娯楽がいっぱいある。現代の若者はテレビに慣れているし、最近ではもはやテレビすらそこまで見ておらず、ユーチューブのようなネット動画の方が面白いという声もある。番組は分かりやすく誰でも理解しやすい、単純な筋書きのバラエティーが増えた気がする。演劇は主題が難しいものも多く、見終わった後にストンとは納得せずにもやもやが残ることもざらにある。視聴者の姿は出演者には見えない状態で、視聴者は一方的に見るという立場に慣れており、観客の反応を受けて毎回変化がある演劇は彼らにはなじみが薄いのかもしれない。

演劇の持つ、格式高いもの敷居が高いというイメージは決して悪いものではなく、むしろそのままであってよい、というピッコロの劇団部古川さんの言葉はその通りだと思った。だが、そのイメージのまま新規層を取り込むにはどうするとよいだろう。これを自分自身の感覚で考えると、劇場は、宝飾売り場、デパートのコスメ売り場に相当するのだろうか。憧れや足を踏み入りたい気持ちがないことはないのだが、どこがどのように良いのか、価値が分かっているうちに買わされてしまいそうだし、別に買わなくても生きていけるし、などと考えてしまう。一回勇気を出して行ってみれば、行きやすいのだが、それが出来れば苦労しない。それでも友達と一緒にだったり、気軽に試せたりすれば行動に移しやすい。

その時出た解決案としては、映像コンテンツをユーチューブや Twitter など若者により近いメディアで宣伝することや、私たちが草の根活動として、友人をゲキ×シネなどに誘い、演劇に対する心的ハードルを下げたところで劇場に行くことがあった。答えのない問いを追及しながら芸術で地域貢献をされているピッコロシアターの皆様はとても輝いてみえ、自分の将来について深く考えるヒントをいただいた。本当に有意義な活動をさせていただき感謝でいっぱいである。

2.4 劇場制作研修 受講生のレポート 4

〔学生からの報告〕

文学部 3 回生 演劇学専修 工藤舞弥

12月13日から16日までの4日間、ピッコロシアターこと兵庫県立尼崎青少年創造劇場が行うインターンシップに参加した。ピッコロシアターでの研修が主であったが、最終日には兵庫県立芸術文化センターに移動してピッコロ劇団による公演の業務補助を行った。「公立劇場」として39年もの歴史を持つピッコロシアターに関し、体験等を通して劇団・劇場事業・演劇学校等さまざまな側面に携わる職員の方々からお話を伺うことができた。

1日目はまず4日間の研修についてのおおまかな説明を受けた後、館内を軽く見て回った。そして12月16日17日の公演で配布されるチラシの折り込み作業を行った。今回のインターンシップの参加者6人を加えても約1000部のチラシの束を作るのに30分以上かかったのだが、普段は2.3人の劇団職員のみで行うと聞きとても驚いた。作業中には冗談を交えつつ、今回私たちのインターンを担当してくださった新倉さんをはじめとする職員の方々と親交を深めた。

その後、資料室に移動し、業務部長の吉森さんからピッコロシアターの手掛ける事業についてのお話を伺った。地域と密接なかかわりを持つ「公立劇場」ならではのコンセプトに基づいた、多岐にわたる事業について詳細な説明を受けた。なかでも強く心に残ったのは「ピッコロシアターは、兵庫県立芸術文化センターがプロの「すぐれた芸術」を提示する場所であるのと対照的に、市民に使ってもらうための劇場であり、観ること以上に演じることを意識して造られている」という話である。なぜ塚口と西宮北口というそう遠くはない場所に二つも劇場があるのか疑問に感じていたのだが、機能的な住み分けがなされているという説明をうけ納得した。広い舞台袖をもつホールや練習室、演劇に関する豊富な資料は市民と演劇を結び付ける場として地域に大いに影響を与えてきたのであろう。この話を聞きながら、私自身の中でこれまで演劇は「観るもの」であり、「演じるもの」であったことはなかったのはこのような場が無かったことが理由なのかと考えていた。休憩をはさみ、初日最後のプログラムとして「みんなの尼崎大学」という一般の方も含めた企画ワークショップが行われた。ピッコロシアターの概要説明・劇団員による演劇ワークショップ・グループディスカッションのなかで、地域の人々との近い距離感というものを実感したように思う。

2日目は田房さんという方の劇場の制作事業に関する話からスタートした。業務についてのみならずその他の素朴な疑問にも真摯に答えてくださり、ピッコロ劇場を支える様々な側面についての見解を得た。役者・観客以外の観点から見る演劇・劇場は非常に興味深く、これから就職活動をする私にとっては視野を広げるいい機会になった。次にピッコロ劇団そのものについて新倉さんのお話を聞き、ピッコロサポートクラブメンバーに郵送される封筒の宛名貼りやアンケート用紙の封入等の事務作業の補助を行った。就職活動や進路、今後の展望についての懇談を経た後、毎週2回行われているという演劇学校の授業を見学した。ピッコロシアターの機能のうち「舞台芸術の人材育成」にあたる演劇学校は実際のホールを使って授業をしており、生徒はプロ・アマを問わないということで年齢層は幅広いように見えた。大ホールでは本科が音楽から想像される場面を身体で表現するという授業を、中ホールでは研究科が相手との間合いを感じるようになるための下ゲームのようなものを二人ないし三人組で行っていた。

これまでと違い3日目は兵庫県立芸術文化センターに集合し、「赤ずきんちゃんの森の狼たちのクリスマス」の場当たり稽古を見学するところから始まった。実際の劇場で、衣装を身に付け、音楽・照明の調整をするものだと事前に聞いていたため小間切れのものだと思い込んでいたのだ

が、後半はほぼ通していたのが驚きであった。今回の上演に参加する子供たちも 1 人前の役者として舞台監督の出す細かな指示に答えようと奮闘していて、公演を翌日に控えた独特の空気の中であつという間に時間が過ぎた。のちにピッコロシアターに戻り広報担当の古川さんのお話を聞いた。広報業務に関することから今後の演劇業界まで幅広い話題を取り上げてくださったが、なかでも公立劇場の意味・役割についての古川さんの意見が去年度の吹田メイシアターの授業を受けていた時に考えていたことの答えのように感じられ強く印象に残っている。休憩後は舞台技術学校のオープンキャンパスに参加した。まず日頃実際に裏方として働く舞台美術・照明・音響のチーフの方から説明を受け、後半は装置に触りながら参加者同士で協力して一つの短い作品を作り上げた。私は主に舞台袖で緞帳を挙げたり、雪を降らせたり、ドライアイスで煙を出すという体験エリアにいたのだが、普段なかなかできない貴重な体験に興奮した。それと同時に普段 1 度の本番のためにどれほど多くの人が気を張っているのだろうと感動した。

最終日は「赤ずきんちゃんの森の狼たちのクリスマス」本番初日であり朝から 1 日兵庫県立芸術文化センターでの業務となった。楽屋口や舞台袖、劇場内は前日と比べても緊張感が漂っていた。私は劇団員 2 名の方と清田さんの 4 人で出演者へのプレゼントの受付を担当した。開場前から家族連れが散見し、開場後も多くの小さな観客たちを見かけた。今回の公演はファミリー劇場という大人も子供も楽しめるというコンセプトをもつ公演形態をとり、兵庫県内の中学生の演劇鑑賞事業も兼ねているだけあって、客層がかなり若いように感じられた。終演後は貸出チャイルドシートの回収作業を補佐した。上演は客席で観劇させてもらったものの、劇場側として一つの公演を見つめることができた 1 日であった。幼少期から「劇場のお姉さん」に憧れていたこともあり、四日間で一番の思い出になっている。

このインターンシップに参加したことで演劇学研究室に所属していてもただ座って授業を受けているだけではわからない、演劇とのかかわり方を学んだと思う。また私にとって大きな収穫だったのは、ピッコロシアターの職員の方々がそれぞれ演劇に対し抱いている情熱であったり、深い理解であったり、信念であったりを直接感じ取れたことである。現場で働く方々のお話を聞けるだけでも貴重な体験であるが、その場で質問に答えていただくことができたことでより実感した。演劇にどこかで関わりたいとただ漠然と考えていた将来が、具体的な話を聞いたことによりうっすらと輪郭を持ち始めたような感覚である。日頃何気なく足を運んでいる劇場でも次に行くときは職員の方にも意識を向けてみようと思う。

2.5 劇場制作研修 受講生のレポート5

〔学生からの報告〕

文学部4回生 演劇学専修 清田采花

1日目は挨拶や簡単な今回のインターンシップの概要説明を終わらせると、まず公演チラシの折り込みを手伝うこととなった。今の時代にこの作業を人の手で行なっていることに驚いた。職員の方は皆さん手慣れており、とてもスムーズだった。この日以降も、このように手を動かす作業をすることがあったが、とても地道な道りであることを感じた。

そして、ピッコロシアターの事業について説明を受け、館内を見学した。小ホールや中ホールは、観劇に来た時などとは違い、何もない状態のホールを見ることができ、本当に何もない部屋だったので、新鮮で貴重な経験だった。以前利用した際に感じた、袖の広さと舞台の大きさにしては少ない客席が、プロではなく、市民の人たちが使いやすいホールということを考えてのことでと聞き、納得し感動した。

休憩後は「みんなの尼崎大学」のピッコロシアターでの講義に参加した。尼崎市側のイベントに参加するのは、兵庫県立であるピッコロシアターにとっても新しい取り組みであるようだった。参加者は予想に反して、劇場や劇団に興味がある訳ではない人が多く、演劇やホールの意義を市民に伝えるという役割をまさに果たす場であった。この中では、ピッコロ劇団の劇団員によるワークショップがあったが、誰でも楽しめるようなものになっており、参加者も大いに楽しんでいった。ただ、普通の手遊びやゲームのようになっていたので、それがどう演技につながるかの説明があればより意味のあるものになったと思う。しかし、市のイベントに出るということで、より近い市民の人々にアピール出来るのは良いと思った。

2日目は、劇場事業についての詳しい説明からだった。阪神淡路大震災の経験を経て、震災への支援を演劇という形で行なっているというのは、素晴らしいと感じた。演劇の意義という点でとても共感した。また、残っている資料がとても細かく、公立だからこそこのような情報を後世に残せたのかと感じた。

その後劇団について、説明を受けた。劇団員が年俸制であることにはびっくりし、思ったより公演やワークショップの数が多く、その多忙ぶりにも驚いた。ワークショップには、教師の方が多く受講するというので、この取り組みがもっと広がり、演劇の価値を知っている子どもたちがたくさん生まれればよいと感じた。

進路について話す時間も設けていただいた。ピッコロシアターには、様々な経歴を持つ方が多くとても参考になった。また、劇場関連の仕事に就く中でもあまり思いつきにくい分野の仕事を教えていただいたりと有り難かった。

この日の最後は、演劇学校の授業を見学した。本科が研究科の上に属することが多いが、ピッコロ演劇学校では逆であるということに、ピッコロが演劇に新たに触れる人を主なターゲットにしているということが伝わって来た。本科の授業は初級者という感じがして、決してレベルが高い訳ではないが、皆さん演技に真摯に向き合う姿勢を持っていた。研究科ではマイム俳優のいいむろなおき氏の出張授業を開催していた。いいむろ先生の授業は刺激的で、みるみるうちに生徒の動きが良くなっているのが分かった。演劇学校とは言え、習い事のような雰囲気だと思っていたが、寧ろ専門学校のようにあり、少しびっくりした。

3日目は、西宮芸術文化センターにて、ピッコロ劇団公演の場当たりを見学した。場当たりを

前日に行い次の日に当日といいのは、さすがプロだなと感じた。作品はほぼ完成に近いとこの時点では感じた。

その後、広報活動や地域交流について伺った。広報をほぼ一人で行っており、出来ることはそれぞれの事業の担当がすることが多いということだったので、もう少し仕事の配分を縦割りにしても良いのでは感じた。また、同じように見えている事業にも、様々な形態があることが分かったし、そこで問題になるのが常にお金であることも分かった。

この日のラストは、舞台技術学校のオープンキャンパスだった。ワークショップ形式となっており、入学したい人以外も参加できるとのことだったが、予想以上の反響を呼んでいた。私自身も、今回の研修の中で一番楽しかった。普段は使えない、舞台機器を触ったり、仕組みを教えていただいたりと興味を引く内容であった。卒業生の中には実際にこの方面で活躍する人も多く、入り口としてとても良い役割を果たしていると思った。

最終日は、子どもたちの出演者込みでの場当たりからスタートした。昨日の印象とは違い、初日だったが、子どもたちはまだ細かいミスが目立ち、練習日程の少なさが垣間見えたが、統率の取れた行動や、ハキハキとした姿にはとても感心した。他のステージで活躍している子どもも多いということだったので、地域の子どもたちに、演劇に親しんでもらうという点では少し疑問が残った。しかし、スムーズな練習という点では、舞台慣れしている子どもとしていない子どもが半分ずつくらいが丁度良いのかもしれない。

本番では私は、出演者へのプレゼント受付を担当させていただいた。子どもたちへのプレゼントがとても多く、友達や家族親戚など、晴れの舞台となっており、客席の入りも良い会場の雰囲気も暖かく、ファミリー劇場として、地域に貢献できていた。劇場スタッフは色々なことに気を巡らせておく必要があり、大変だった。

この研修を通して、劇場での仕事は小さいものから大きなものまで全てを自分たちでやっていたかなければならず、総合力が必要とされる仕事であることが分かった。その中でもピッコロシアターは、商業的成功よりどうすれば演劇に親しみのない人がその良さを分かってくれるかという企画に日々頭を捻っていることが分かり、0、1、2歳児のための人形劇や耳や目の不自由な人も楽しめる演劇などはとても印象的な取り組みであった。このような劇場が全国的にも増えれば嬉しいと感じた。4日間で貴重な経験となった。

2.6 劇場制作研修 受講生のレポート 6

〔学生からの報告〕

文学部 4 回生 演劇学専修 小國真奈

はじめに

2017 年 12 月 13 日から 16 日までの 4 日間、兵庫県立ピッコロ劇場において、インターンシップを体験した。同 16 日・17 日には、兵庫県立芸術文化センター阪急中ホールにてピッコロ劇団による音楽劇『赤ずきんちゃんの森の狼たちのクリスマス』が上演される予定であり、その初日までの 4 日間を劇場研修させていただいた。本レポートでは、インターンシップの具体的な内容と考察を述べる。

インターンシップの具体的な内容

①オリエンテーション

インターンシップ前に行われたオリエンテーションでは、ピッコロ劇場・劇団についての基礎知識を得た。その際強調されたのは、ピッコロ劇場は兵庫県の公立劇場であり、ピッコロ劇団という公立劇団を持っていること、そして、公立劇団を持つ公立劇場は日本では稀で、ピッコロ劇場はその先駆けであるということだった。また、ピッコロ劇場は兵庫県立芸術文化協会に業務を委託しており、自治体の公務員と民間の関係者が混在して公演を行う場合があることも知った。そして、今回の公演である『赤ずきんちゃんの森の狼たちのクリスマス』は、家族向けの「ファミリー劇場」という公演であり、普段の一般向けの公演とは違うため、制作等においてどのような違いがあるか興味を刺激された。

②1 日目

1 日目(12 月 13 日)は、ピッコロシアター職員である業務部長の吉森氏に劇場と事業についてお話をいただいた。ピッコロ劇場は、正式名称は兵庫県立尼崎青少年創造劇場であり、「青少年の自由な創造活動を促進し、あわせて県民文化の高揚を図る」という理念のもと、1978 年に開館された。ピッコロシアターは、劇場には大ホール(396 席)、中ホール(定員 200 名)、小ホール(定員 100 名)の 3 つのホールがあるほか、練習室、展示室、演劇に関する書籍を所蔵する資料室からなり、ホールは、観ることよりも演じることに重点を置いた「使いやすい演技空間」として地域住民に演劇・音楽・舞踊等の公演・リハーサル等に活用されており、年間稼働率は 90%を超える。これは、ピッコロ劇場の事業の(1)「青少年の創造活動や発表の場の提供」にあたる。ほかに、ピッコロ劇場の事業として、(2)「芸術文化活動の普及啓発」、(3)「舞台芸術の人材育成」、(4)「学習機会・情報の提供」、(5)「兵庫県立ピッコロ劇団の運営」がある。たとえば、質の高い舞台芸術の鑑賞機会を提供する「ピッコロ鑑賞劇場」を開催したり(2)、演劇人を育てる「ピッコロ演劇学校」及び「ピッコロ舞台技術学校」を開設・運営したり(3)、演劇関係者による講演会「ピッコロシアター文化セミナー」や演劇等の体験学習ができる「ピッコロ実技教室」を実施したり(4)、「ピッコロ劇団」の公演活動と演劇の指導・普及を行ったり(5)している。

次に、同日開催された「みんなの尼崎大学」での体験について述べる。「みんなの尼崎大学」は、「みんなが先生、みんなが生徒、どこでも教室」をモットーに、まちにある様々な場所をキャンパスにみたく、市内外、年齢を問わず、みんなで尼崎におけるこれからの学びについて考える場として、尼崎市が提供するものである。研修生が参加した、「みんなの尼崎大学」第 14 回「日々の暮らしに演劇を」は、演劇経験に関わらず、演劇の楽しさを学ぶことが趣旨である。参

加者は実際に舞台上がり、せりを体験したり、ピッコロ劇団の劇団員によるワークショップで演技体験を行った。たとえば、ワークショップでは、劇団員の講師が参加者に二人一組になりじゃんけんをするように指示した。3回のじゃんけんのうち、じゃんけんの直後に、1回目は自分が出した手を口に出すこと、2回目は相手が出した手を口に出すこと、3回目は自分と相手が出した以外の手を口に出すことを指定された。これは、まずは自分について考え、次に相手について考え、のちに自分と相手について考える、という演技をするときの思考回路に似ているため、このじゃんけんを通して参加者は演技をするということのイメージを得た。そのほか、参加者が二人一組になって、一人がもう一人の体を動かして「作品」として表現したり、参加者がグループに分かれ、それぞれ与えられたテーマの場面の静止画を、人を使って作り共有するというものがあった。参加者には演技の経験がない人も含まれていたが、参加者は、実際に体を動かして演技について考えその面白さを体験することができた。

③2日目

2日目(12月14日)は、ピッコロシアター職員である業務部の田房氏とインターンシップ研修生の世話を担当して下さった劇団部の新倉氏より、お話をいただいた。田房氏は、0歳から参加できる赤ちゃん向けの演劇イベントの「シアタースタート」に携わっている。田房氏は、日常的に演劇に触れる機会が限られてしまう赤ちゃんやその母親にも演劇を楽しんでもらうことも公立劇場の役目であると語った。また、田房氏は、以前幼稚園の先生として勤めていた経験を、赤ちゃんの集中力を考えたうえで赤ちゃんの注意を劇に向ける工夫を考えることに生かしているという。職員のスキルや得意な分野が企画に役立てられているのを目の当たりにし、ピッコロシアターの運営の強みを感じた。新倉氏には、ピッコロ劇団の公演活動や、ピッコロシアターのアウトリーチについてお話をいただいた。ピッコロ劇団は、年3回の本公演(うち1つがピッコロシアターによるプロデュース公演で、客員やオーディションにより関西で活躍する俳優が出演に加わる)、県内の中学生に劇場での演劇鑑賞の機会を提供する「わくわくステージ」、劇団員が自ら企画・立案を行った実験的な舞台を、役者と観客の距離が近いピッコロシアター中ホールで上演する「オフシアター」、年2回(夏・冬)の家族向け公演「ファミリー劇場」、劇団員が小学校に足を運び子供たちに演劇を楽しんでもらう「おでかけステージ」を行っている。関西で活躍する俳優に出演してもらうことは、関西の演劇土壌を刺激する狙いがあり、また、劇場の一般的な客層から外れる小学生や中学生のために演劇を届けるのは、公立劇場として年齢や演劇の教養の有無を問わず演劇を地域住民に届けようという使命感と、演劇を見に行く人口の拡大への期待が反映されている。さらに、ピッコロ劇団員は、教員や行政職員を対象に、言葉やからだ、五感を用いて表現することの面白さや大切さを体験してもらうワークショップを行うなど、劇場外での活動も活発に行っている。ピッコロ劇団員が、ただ上演だけを目指すのではなく、演劇が人間形成にもたらす可能性に注目し地域社会に貢献していることを知った。

次に、ピッコロ演劇学校の授業見学について述べる。ピッコロ演劇学校は、地域文化活動のリーダーを養成することを目標として1983年に開設された。ピッコロ演劇学校には本科と研究科があり、本科は演劇初心者向け、研究科は演劇経験者向けに設定されている。本科の授業では、先生が音源を用意し、生徒にそれを聞かせ、そこからイメージするものを実際に体を動かして再現させて共有するという、表現力や創造力を養う訓練をしていた。研究科の授業では、マイム師のいいむろなおき氏により、様々なルールのもとで体を動かし、演技に必須である自分と相手を知り、信頼することを徹底させるような訓練を行っていた。たとえば、生徒が二人一組になり、一人が手のひらをもう一人の背中に密着させ、手のひらを背中にくっつけている側の人が教室

を自由に動き、もう一人は目をつぶって、手のひらにひっぱられるように後ろ向きについていく。手のひらにより動きを指示された方の方は、自分の背中にあてられた手のひらの動きにできるかぎり敏感になり、スムーズな動きを目指した。これは、普段人とコミュニケーションをとるときに用いる視覚や言語には頼らず、手のひらから伝わる限られた情報に敏感になり相手とコミュニケーションをとるといいう訓練であった。ピッコロ演劇学校では、本科・研究科一貫して演劇における表現の難しさや面白さを皆で一緒に考えるという姿勢が見え、興味深かった。

④3 日目

3 日目(12 月 15 日)は、まず兵庫県立芸術文化センターにて、翌日に初日を迎える『赤ずきんちゃんの森の狼たちのクリスマス』の場当たり稽古を見学した。舞台上に役者が、客席側に演出家、演出助手などのスタッフがいて、場面を細かく区切りながら整えていった。ここでは演技の指導が中心として行われるわけではなく、あくまで舞台の進行を中心に公演に備えるものだった。稽古場で演技を練習してきた役者と公演当日に舞台を進行する裏方が初めて舞台で顔をあわせ、公演当日までひとつの舞台としていかに高めることができるかを試す段階であるため、緊張感も感じられた。

また、この日はピッコロシアター職員である業務部の古川氏にお話をいただいた。古川氏の業務は広報を中心に多岐に渡り、その責任の重さとひとりひとりの職員の業務負担の大きさを感じた。特に古川氏は、視覚障がいのある観客向けの音声ガイドの導入に携わった。これは、視覚障がいがあるために舞台を視覚的にとらえられない人のために、公演中にイヤホンを通して音声で舞台の様子を伝え、演劇を楽しむ補助としてもらうものである。初期は、舞台の様子を正確に伝えることを重視したためアナウンサーを起用したが、そのうち、演劇の伝えやすさや伝えどころを熟知するピッコロ劇団員を起用するようになったところ、舞台の情感が伝わりやすくなり評価されたという。公立劇場で音声ガイドを取り入れたのは、全国でも早い試みだった。地域住民である限り、障がいのあるひとにも舞台を楽しんでもらうべきであるという、公立劇場ならではの取り組みでもあったと感じた。

次に、ピッコロ舞台技術学校のオープンキャンパスでの体験について述べる。ピッコロ舞台技術学校は、1992 年に全国の公立文化施設ではじめて、舞台技術を学ぶために開設された学校であり、実際の劇場設備や機材を用いて、美術、照明、音響を学ぶことができる。当日は、予想していた以上の人数が集まり、後半において実際に機材に触る体験が全員にまわるかどうか心配するほどの盛況だった。参加者は、実際に美術、照明、音響の機材に触れ、春夏秋冬をイメージした一場面を進行する体験を行った。当日は機材に関する資料も豊富に配られ、参加者はオープンキャンパスに参加するだけでも、演劇教育に触れる満足な体験ができたのではないだろうか。

⑤4 日目

4 日目(12 月 16 日)は、『赤ずきんちゃんの森の狼たちのクリスマス』の公演初日であった。まずインターンシップ研修生は、兵庫県立芸術文化センターにて、公演に参加する子供たちの舞台稽古を見学させていただいた。子供たちは、オーディションで選ばれ、公演初日にむけて稽古を重ねてきていた。子供たちには子供たちを指導する先生がつき、最終的な微調整が行われた。子供たちを指導するときは、子供たちに伝わるようわかりやすく伝え、かつ、子供たちが公演まで教えられたことを覚えておくように工夫する必要があるため、子供たちに平易な言葉で伝え、繰り返し練習させていたのが印象的だった。

また、当日インターンシップ研修生は、開演・上演前に受付の業務の補助をさせていただいた。受付周辺では、お客様を受付に誘導して入場を促し、お手洗いや喫煙所などのお客様からの簡単な質問に答えた。出演者へのプレゼントの預かりや、子供用の座席クッションの配布、出演者との写真撮影のお手伝いなどもさせていただき、慌ただしいながらも正確に、かつ、お客様に快適に観劇を楽しんでもらう大変さと楽しさを体験することができた。

インターンシップを経験した全体の考察

このインターンシップでは、主に民間の劇場と公立の劇場との違いや、その目的意識や実情の違いに目をむけることができた。一般的に民間劇場では、できるだけ多くの観客を動員して、興行としての成功を目指すのに対し、公立劇場では、国の予算を活用し、地域の公共財として地域に還元することを目的にする。公立劇場では、たとえ社会の一部の弱者を助けるのにすぎなくとも、たとえすぐに効果が出ず長期的な取り組みになろうとも、地域社会に貢献できるならばやるべきであるという目的意識がある。また公立劇場では、予算を確保しなければいくら理想があっても実行することができないという厳しさがあるが、反面必ずしも経済的利益に直結する必要がないという利点と表裏一体であると感じた。

さらに、ピッコロ劇場が劇団をもつ公立劇場であることで、どんな利点があるのかを考えた。ピッコロシアター職員の古川氏がおっしゃったように、それは、劇場と劇団が身内関係であるがゆえに、比較的スムーズに情報伝達が行えることではないかと考えた。すなわち、劇場が行うワークショップに劇団員を起用することができたり、劇団員の声が劇場運営側に、また、劇団員を通じて観客の反応が劇場運営側に伝わりやすいのではないかと考えた。また、毎度異なる劇場に公演をしに行くのに比べ、決まった劇場で決まった職員と公演づくりができるため、安定して公演が打つことができ、特定の目標を掲げた公演も続けやすいのではないだろうか。

おわりに

普段劇場に足を運ぶ際は、単に観客としての立場で芝居を見ていたにすぎなかった。しかし、今回のインターンシップでは、立場が一転し、制作の立場から、ひとつの公演が稽古やりハーサルを経て初日を迎えるまでを見せていただいた。このインターンシップを経験し、舞台には、観客として劇場を訪れる際に目にする人々よりずっと多くの人が関わっているということを感じ、芝居が面白いかどうかということだけではなく、その公演の持つ社会的意義や、その劇場が地域に与える影響などを、公立劇場側の視点からとらえることができた。また、実際に劇場で働く人々に直接お話を聞き、質問をすることで、現場の生の声が聞くことができた。今回得た知識や考え方を、今後の授業や卒論執筆に役立てたい。

謝辞

最後になりますが、インターンシップ研修生を受け入れてくださり、丁寧に対応をしてくださったピッコロシアター関係者の皆様、この度は大変お世話になりました。貴重な体験をさせていただき、とても実りあるインターンシップとなりました。心より感謝申し上げます。

3 美術関係

3.0 大阪市立美術館でのインターンシップ

文学研究科（美術史学研究室）教授 藤岡穰

報告者等が開講している東洋美術史演習（論文作成演習）は、日本・東洋美術史を専攻する院生を対象に、論文作成のみならず、調査研究の実践力を身につけることを目的とし、研究者としての総合力を涵養することを目指している。また、美術研究のうえでは大学などの研究機関と両輪をなす、博物館施設におけるインターンシップへの参加も奨励しているが、その受け皿として利用させていただいているのが大阪市立美術館のインターンシップである。2017年度には2人の院生が応募し、採用された。

大阪市立美術館のインターン（研修生）制度は、2008年度に創設されたもので、近畿一円の大学院で美術史を専攻する学生若干名のインターンを受け入れ、学芸員育成のための研修を行っておられる。以下に、その募集要項を抜粋する。

大阪市立美術館インターンシップ制度

1 趣旨

大阪市立美術館では、将来学芸員をはじめ美術館に関わる仕事に就くことを希望している方を対象に、人材の育成と当館の活動をより広く理解していただくことを目的として、インターン（研修生）を募集します。

2 研修内容

平常展、特別展を中心に学芸業務全般に関して、当館学芸員と共に携わっていただきます。

3 受入対象

大学院在学中もしくは修了者で、美術史や美術・文化に関連する分野を専攻する者、または同程度の能力・経験を有する者。

4 受入人数

若干名

5 研修場所 / 期間

大阪市立美術館ほか 2017年5月中旬～2018年3月31日 [10ヶ月程度]

6 研修日 / 時間

原則として、1週に1日程度

9:30～17:00 [昼休み1時間程度]

7 受入条件

- (1) インターンの報酬は無償とします。
- (2) 交通費/食費は支給しません。
- (3) 傷害保険に加入していただきます(費用は美術館で負担します)。
- (4) 当館とインターンとの間で誓約書を交わしていただきます。

8 応募方法等

応募書類

◇ エントリーシート

◇ 小論文 課題「大阪市立美術館インターンシップで学びたいこと」1200字程度

(4)選考と通知 応募書類と面接により選考します。

一次審査[書類選考] 結果通知 4月下旬

二次審査[面接] 4月下旬

最終結果 通知 5月上旬

9 修了証 規定時間[150時間以上]、研修を修了した方に対し、修了証を交付します。

●募集分野と主な研修内容

・中国書画（担当弓野隆之、森橋なつみ）

館蔵の中国書画を中心とした基本調査と、そのデータベース化を進めるための作業補助。また年度内の企画展示にむけた一連の業務および将来の特別展に向けた資料調査などを学芸員とともに行う。中国書画についての専門知識は必ずしも問わないが、美術に関する基本的な知識を有し、興味を持って諸作業に臨める人が望ましい。

このように、2017年度の研修内容は、大阪市立美術館が世界に誇る阿倍コレクションをはじめとする中国書画の基本調査の補助等を主眼とするもので、またコレクション展の企画についても参画する機会を得られるなど、中国書画、日本中近世の書画を研究対象とする学生にとってはこの上ないものであったが、文学研究科からは2名が応募し、ともに採用していただいた。

大阪市立美術館のインターンは、担当学芸員のもとでその補助業務を行うことを原則とし、特別展や常設展、普及事業など、学芸員がその年度に担当する仕事に共に携わる。ほぼ1年間にわたり継続的に行われる研修は、それゆえ責任も大きく、大学院生にとってもかなりの負担になる。しかし、それぞれの学芸員の方のご配慮（大変なご負担）により、単に補助的な業務に終始するのではなく、美術史研究のうでも有意義な、本当の意味での育成をしていただいております、とても貴重な経験の場となっている。この場を借りて、ご担当の学芸員の方々に感謝申し上げたい。

3.1 大阪市立美術館インターンシップ報告

文学研究科 博士後期課程 3年 波瀬山祥子
文学研究科 博士前期課程 2年 永谷かのこ

■研修先

大阪市立美術館

■研修期間

2017年5月16日～2018年3月29日

■参加の動機

学芸員を目指すものとして、現場の仕事を実際に体験し、作品の取り扱い、展覧会の企画運営について学ぶとともに、美術に関する知識と理解をより一層深めるため、本インターンシップに参加した。

■研修内容

以下の作業を学芸員と相談し、並行して行った。

① コレクション展の企画・展示

平成30年10月14日（土）～11月26日（日）に開催されたコレクション展について、展示タイトルの決定から作品の選定、解説執筆、展示作業、撤収作業までの一連の作業を行った。館蔵の中国書画を中心に展示し、中高生にも分かりやすい補助解説パネルを設けるなど、学生の視点からの工夫を加えた。

② 阿部コレクションの調査

平成30年秋に開催予定の阿部房次郎のコレクション展に関する基礎調査を行った。およそ120点のコレクションすべてを調査し、表具や付属品の写真撮影の補助をしながら、作品の取り扱い方を学んだ。

③ その他

中国書画のコレクション展の展示作業の補助を行った。また、普段触れる機会が少ない工芸品などの立体物の展示の仕方や取り方も教示頂いた。

■感想

「書画にあそんだ11ヶ月」波瀬山祥子

インターンを終えて、昨年より成長した、というより作品を見ることを純粹に楽しめるようになった気がする。中国美術を学ぶ機会が大学では少なかったため、毎回知らない画家や作品に出会うのが新鮮で勉強になった。作品を数十センチの距離で見ると、巻いたり広げたり、運んだり、という経験の積み重ねで、作品を身近に感じられるようになっていった。積極的に調査に参加させて頂いたことで、作品に対する敬意と責任感を培うこともできた。

秋のコレクション展「書画にあそぶ」は、インターン生メインでやらせて頂いた。作品を限られた空間にどう展示すればよいか、学芸員さんにアドバイスをもらいながら考えを練った。また、

中国美術に馴染みがない人にも親しみを持ってもらいたいと、キャプションにはキャッチコピーを付けることにし、永谷さんと「ちょっとふざけ過ぎかな」などと、奔放に意見を言い合うのが楽しかった。今振り返れば、鑑賞者に見やすい展示を、と言いながら自分たちが楽しんでいただけなのかもしれない……。しかし、展示室には、じっくり見てくださる人の姿もあり、後日「よかったよ」という感想を頂いたときは本当にうれしかった。正直、展示室は古くて見やすい環境ではないが、ちょっとした工夫で面白い展示が出来る。何事もあきらめないことが肝心だと思った。

四月から運良く職を得て、学芸員として働くことになった。これまでの経験を活かして、作品整理から展示解説まで精一杯頑張ろうと思う。困難なことも多いと思うが、自分自身が仕事を楽しむということを大切にしていきたい。

「インターンシップを通して」永谷かのこ

インターンシップでは、学芸員お二人のご指導の下、阿部コレクションを中心とする中国書画の調査、コレクション展の企画、展示作業等に携わった。日本の近世絵画を学ぶ私にとって、日本に大きな影響を与えた中国の書画に触れながら、さらに学芸員という仕事の一端に関わられたこの11か月間は本当に実り多い時間だった。

何より、たくさんの素晴らしい作品を間近に目にできたことは、何にも代えがたい貴重な体験であった。特に印象に残っているのは、秋のコレクション展「書画にあそぶ」に関わる一連の作業である。ここでは展示タイトルの決定から作品の選定、解説執筆、展示作業、撤収作業まで行った。作品の選定と配置の決定では、実際に作品を列べたときのバランスや印象がうまく想像できず苦戦した。また、解説の執筆では、誰に・何を・どのように見てほしいのか、ということを書いた文章にまとめるのが難しかった。しかし、展示の完成形を思い描きながらの作業はどれも楽しく、時間を忘れて取り組んだ。展示作業においては、作品の配置はもちろん、作品の高さ、隣り合う作品とのバランス、照明の色、明るさ、キャプションの配置など、些細に思える様々なことが展覧会の雰囲気や見易さなどに関わる重要な要素であると実感した。

今回、美術館における様々な仕事を実際に目にし、体験することで、一來館者として美術館を訪れるだけでは決して知りえなかった多くのことを学ぶことができた。大変貴重な体験ができた11か月間だった。